

42552

教科書文庫

4
810
44-1938
200030
1765

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

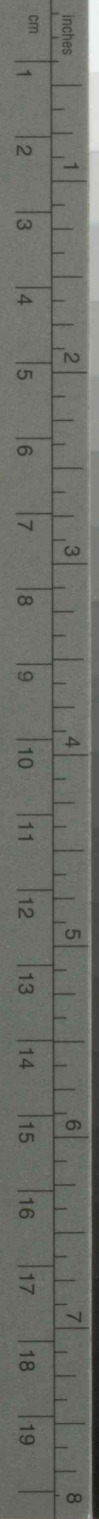
C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部省検定済

375.9
Fu10
資料室

帝國新國文
改版卷一



文部省檢定濟
昭和三十一年十二月十四日實業學校國語科

P

資料室

375.9
Fu10

文學博士 藤村作編

帝國新國文

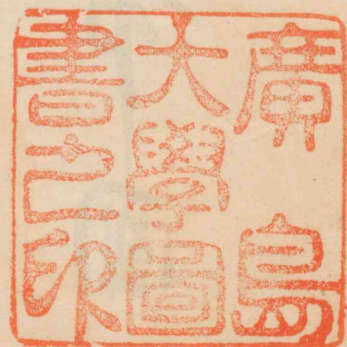
改版

東京

帝國書院



富士山標



帝國新國文改版卷一

目次

一	或棟梁の話	藤村作	一
二	黎明來れり	北原白秋	八
三	花の都	芳賀矢一	一〇
四	狆の彫刻	高村光雲	一四
五	無線電信の發明	山崎延吉	二四
六	我が國の特徴	山崎延吉	二九
七	繪の旅	矢崎千代二	三三
一	啞で聾		三三
二	見物人の親切		三六
三	世間のいろく		三八

八 獨逸の少年
 九 海舟の苦學
 一〇 舟路
 一一 空の旅
 一二 苺の味
 一三 尊徳先生の教訓
 一四 朝顔の種
 一五 森の英雄
 一六 夏の興趣
 一七 國民の士氣と精神
 一八 朝が來た
 一九 烏と猫
 二〇 雙眼鏡

池田宜政 四一
 山路愛山 五四
 島崎藤村 五九
 久米正雄 六二
 五十嵐力 七一
 三浦修吾 八四
 薄田泣菫 八七
 相馬御風 九一
 徳富蘇峯 九五
 千家元麿 一〇二
 夏目漱石 一〇五
 山田珠樹 一二二

二一 會得
 二二 大海の日の出
 二三 乃木將軍
 一 將軍の涙
 二 火を消して
 二四 英雄の半面
 二五 皇室に對する情熱
 二六 母をたづねて(その一)
 二七 母をたづねて(その二)

沼波瓊音 一二一
 徳富健次郎 一二四
 櫻井忠温 一二八
 一 一 二八
 二 一三五
 藤村作 一四〇
 永田秀次郎 一四七
 楠山正雄(譯) 一五二
 一六〇



一 或棟梁の話

藤

村

作

余が廣島市に職を奉じてゐた時分のことであつた。

或朝夙く郷里のある棟梁が訪ねて來た。實に意外な客であつた。郷里にゐた若い頃に、余もよく知つてゐたが、生家とは可なり深い關係があつた。

この珍客には余も心からの歡待をした。午後散歩に連れ出さうと思つて、

「廣島は水の風致に富んでゐるから、宇品の方面かけて暫く散歩して見よう。」

と誘ひをかけると、彼は、

「私は大工です。景色なんでもものには盲目ですから、同じことなら街でも見物させて頂きませう。」
といった。言はれて見ると、まことにさうであらう。それではと、街の散歩に出かけた。

大した興味もなささうに黙々としてついて来る彼の心を讀み取らうと、余は絶えず注意してゐた。

郷里の田舎町に較べると、広島は大都市である。街頭の美観は彼此比すべきものでない。それでも店舗などは何の注意を惹かないらしかつた。そして彼は兩側の家屋の檐から上の構造に就いて、何か氣づいたものがあるらしく、左視右顧してゐた。とう／＼口を開いて、

「あそこの所は郷里の建て方と違つてゐます。」

といふやうな大工の専門的な話をしかけたのであつた。建築―殊に現代建築に關しては、何等の知識を持たない余は、何の合榫も打てないので、唯「さうか／＼」と聞いてゐる外なかつた。

やがて余の買ひつけの書店の前を通りかけると、彼は、「こゝに本屋があります。大工の書物はないでせうか。」
といった。

「あるかも知れない、聞いて見よう。」

といつて、余は建築に關する書を全部見せて貰ふやうに店員に頼んだ。

棟梁は明治十年代の怪しい学校教育を申譯けに受けただけの人であるから、書物を買つてもどうするのだらうと、余は内心彼の爲に餘りむつかしい書物など見せてくれないことを望んでゐた。

店員が五六部の建築學書を並べると、彼は殆どそれらに一顧をも與へなかつた。そして昔の何とかいつた日本の建築書を選び出して、彼はかういつた。

「折角ですが、皆家に持つてゐるものばかりですから。それから二軒ばかり本屋を廻つて見たが、終に彼の知らない、持たない書は一つもなかつた。これには余は驚かされた。店を出てから、

「あなたはそんなに本を集めてゐなさるか、そしてそれを皆讀んでゐなさるか。」

と問ふと、

「御承知の明盲目ですから、本を集めても満足には讀めません。併し御方便なもので、大工の本なら畫圖を見れば大抵はわかります。それでもわからない所は倅に讀ませます。倅はちつとばかりは學校にも上りましたから、どうやらかうやらわかります。」

かういふ時代ですから、昔親父に習つた技ばかりぢや、もう大工もやつて行けませんから、本だけは絶えず集めて見てをります。今丁度殿様(舊藩主)のお邸の日本建築の

方をやらせて頂いてをります。監督さんは學士さんで、遠方からお見えになつてをりますが、日本の本ならその學士さんより私の方がよく知つてをります。この頃は、その監督さんが私の家に本借りに見えます。無學な彼、舊式の棟梁とのみ思つてゐた彼は、中々の物知りで、新しい知識の吸收者であつた。

その後歸郷した時、家兄にこの事を話すと、家兄は、「棟梁はそれは感心な男だよ。頭もあり、腕もある立派な棟梁だよ。仕事より外何もないといふ熱心家だから、仕事だけは立派にするよ。併し一生貧乏を離れることの

出来ない男で、入札仕事など請負うても、請負價額だけの仕事をしないで、自分の満足する仕事を遣さうと思ふものだから、いつも損失々々で、あれぢや誠に氣の毒なものだよ。まあ今の時代には珍しい人物だよ。」といはれた。

余は専門の仕事の上では、絶えず時代に後れまいと努力してゐる彼が、その靈に深く植ゑつけられてゐる昔の工匠氣質はどうすることも出来ないで、貧乏な田舎棟梁に一生を送つて朽ち行く尊くも又哀れな姿を想ひ浮べるのであつた。

北原白秋
名は隆吉
福岡縣の人
詩人

二 黎明來れり

北原白秋

黎明來れり、

凜たる黎明。

げにくく日の御子。

光り立たせり。

萬歳、萬歳、萬歳。

仰げよ、青雲

新し、ふたゝび。

われらが夫君、

若くいませり。

萬歳、萬歳、萬歳。

世界よ、輝け、

崇き稜威に。

充ち満て、ひとつに、

國は和したり。

萬歳、萬歳、萬歳。

昭和の御代こそ、

榮あれ、いよく。

げにくく若きは、

光る空なり。

萬歳、萬歳、萬歳。

仰げよ、讚へよ、

凜たる黎明。

われらが夫君、

若くいませり。

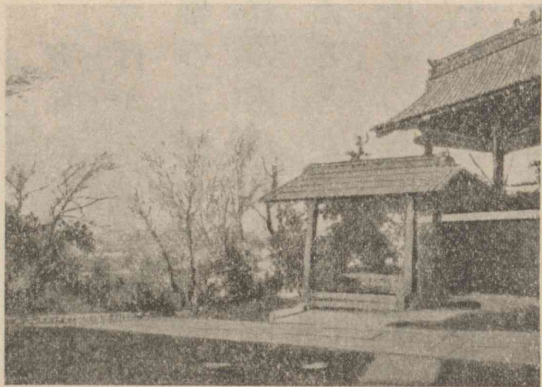
萬歳、萬歳、萬歳。

—青年日本の歌—

三 花の都

東京の上野の山に「秋色櫻」といふのがある。お秋といふ

芳賀矢一
福井市の人
國文學者
文學博士
東京帝國大學名
譽教授
昭和二年歿
(年六十二)



清水堂と秋色櫻

娘、十三歳の時父に伴はれて上野の花見に行つたが、清水觀

音堂の側の井戸の傍に、酔客のよろ

よるとしてあぶなげなのを見て、

井戸端の櫻あぶなし酒の酔

と口ずさんで、短冊にしたゝめて下

枝にさげた。時の寛永寺の法親王

は風雅の道を嗜まれて、枝にかゝつ

た短冊を一々取りよせて御覽にな

つたが、日頃の秀逸これに越したも

のは無いと、わざ／＼秋色女を呼び出されて賞賜もあつた

といふ。この二百年前の古木の傍に「秋色櫻」の立札がある。



太田南畝
蜀山人・四方赤
良・四方山人等
とも號す
狂歌・狂文家
文政六年歿

東都は京都に比べて、山水の勝は甚だ劣つてゐるが、櫻の花ばかりは、京都を凌いで居る。京都には嵐山や祇園等の櫻の花ばかり。四月頃の東京は、満都花に埋れて眞に「花の都」の感がある。聞けば、東京の地味は最もよく櫻に適してゐるとか。上野・浅草・向島・飛鳥山・芝公園・靖國神社など、到る所、花の無い所は無い。徳川二百幾十年間の太平は、江戸人をして、飽くまで都の花に遊ばせた。國民の樂天的の氣象を最もよく發揮したのは、この時代であらう。太田南畝が、一面の花は碁盤の上野山

黒門前にかゝる白雲

と歌つたのも、加藤枝直が、

隅田川長き堤も春の日も

短くするは櫻なりけり

と詠んだのも、眞に昌平の音調、大宮人の櫻かざした上代とは事かはつて、太平を謳歌した庶民の聲である。



前田氏實筆 櫻狩

青に
よし奈
良の都
の昔か
ら平安

加藤枝直
江戸の歌人
千藤の父
天明五年歿

朝、鎌倉・室町將軍の世々を経て、江戸の太平時代に至るまで、兵馬倥傯の間にも、殿上管絃の間にも、念佛三昧の間にも、詩歌に、連歌に、狂歌に、俳句に、悠々として世を楽しんだ人も、悶悶として時を憂へた人も、等しく花に對しては、笑の眉を開いたのである。

一月雪花

四 狎の彫刻

高村光雲

高村光雲
東京市の人
彫刻家
昭和九年歿
(年八十三)

さて、鏡縁御欄間の仕事が終りますと、今度は以前より、もつと大役を仰せつかりました。

これは貴婦人の間の裝飾となるのださうでございますが、貴婦人の間のどういふ所に附いたものかその御場所は

存じません、何でも御階段を昇り切つた所に柱がある、その裝飾として四頭の狎を彫れといふ御命令でありました。

これは東京彫工會へ御命令になつたので、木彫で出来るのでは無く、鑄金となつて据ゑられるので、鑄金の方は大島如雲氏が致すことになつたが、原型の彫刻は高村にさせるといふ御指命で、彫工會がお受したのであります。

そこで、私は原型を木で彫ることになりました。大體の下圖は廻つて來ましたが、今度は鏡縁御欄間のやうな平彫とは違つて、狎の丸彫といふのですから、下圖にたよつて居るわけに行かない。先づ何より第一番にモデルとする狎の實物を手に入れることが必要となつて來ました。

併し、狎を手に入れるといふことは容易でない。狎はあつても好いものは稀です。好いのがあつても高價で中々

手に入りません。ふと嘗て淺草の三筋町を通つた時に、或葉茶屋に好い狎のゐたことを思ひ出したので早速出掛けて行つて見ると、店先にチャンとその狎は居ました。狎らしい狎で好ささうに思はれたので、欲しくなりましたが、葉茶屋では自慢にする程可愛がつて居るらしいので、一寸どうするわけにも行きません。けれど



高村光雲

も、先づ當つて見ようと思つて、入用でもない番茶などを買いまして、店先に腰を掛け、そろ／＼その狎を褒め出したものです。可愛がつてゐるものを褒められれば、誰しも悪い氣持はしません、細君が奥から出て來て講釋を始めた。私は一服やつて、狎の話を聞きながら、細君のあやしてゐる狎の様子をなほよく見ると、どうも狎らしくて好ささうであつた。

そこで私は言葉を改め、

「實は、私は近日狎を一つ彫ることになつてゐるのですが、お宅の狎は種が好ささうですから、これを手本にして彫つたら申分なからうと思ひます。手本にするには手元

に置かなければ仔細な所を見極めることが出来ません。如何なもののでせうか、無躰なお願いですが、此の狎を一週間ばかり拜借することは出来ますまいか。もつとも狎の手當はお習ひして、決して疎略にはしません。一つ御無心をおき、下さるわけには参りますまいか。」

斯う私は申し込みました。

すると、細君は大變驚いた顔をして、私の顔を今更のやうに眺めて居りました。

「さうでございますか。貴方が狎をお彫りになるのですか。でも、生物のこととて、一寸お貸しするといふわけにも参りませんよ。これはもう私の子供のやうにして、可愛

がつてゐますので暫くも私の傍を離れませんから……」
といふ挨拶。

どうも、一寸話が纏まりさうでないから、もう何もかも本當のことを言つて頼むより外仕方はないと思ひ、——もつとも、愈となれば、さうする考でもゐましたので、私は更に押返して、

「……實はまだ詳しいことも申し上げず、いきなり狎を拜借したいと申し
ては、藪から棒で無變にお思ひでしたらうが、私は今回、皇居御造營に就いて、貴婦人の御間の裝飾に狎を彫刻する



(作 雲光村高)

狎

ことをお上から命ぜられましたので、その爲方々好い狎
の見本を探して居ります。貴店の狎は、如何にも狎らし

猿

く美事であると、平常から思つ
て居りましたので、今日實はお
立寄して拜借を願つたやうな
譯なので……」

と、話し出しますと、細君は二度吃
驚といふやうな顔をして、



(作雲光村高)

「まあ、さうでございますか。皇居御造營のことは私共も
噂で承知して居りますが、すると、貴君は狎を彫つて貴婦
人の御間へそれをお納めになるのですか。」

「さうなんです。それで鳥屋へも二三軒行つて見ました
が、どうも氣に入つた狎が居りません。貴店のに比べる
ととても狎のやうにも見えませんので……。これが、賣
物にでもする彫刻なら、氣に入らない見本でも間に合せ
ますが、何しろ、宮城の貴婦人の御間へ備へ附けられます
のですから……」

「まあ、お話を聞けば勿體ないやうなことでございますね。
すると、此の狎を見本にしてお彫りになれば、この狎の姿
が九重のお奥へ参るわけでございますね。」

「さうです。御場所柄のことで高貴の方の御集りになる
所へ飾られますわけて。」

「さうでございますか。ではまあ、お見立てに預つた狎は、随分名譽なことでございますわね。」

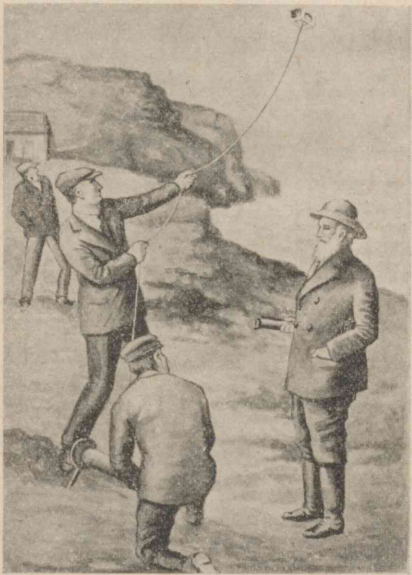
「さやうです。狎に取つてはこの上もないことと申しても好いかと思ひます。」

婦人相手のことでもあり、私も一所懸命で願望を遂げた**いばかりに辯を振ひました。**細君も右の次第と分つて見れば、**すげなく斷るわけには行かなくなつたと見えました。**そればかりでなく、皇居の御用といふので、細君も深く感じたものと見えまして暫く考へて、良人や娘などにも相談した末、快く貸してくれることになりました。

「畏多いお場所のお飾物に、この狎の形が彫られるのでしたら、形のある限りは後に残るわけでございますねえ。それではお役に立つものなら立てて下さいまし。私共も大よろこびでございます。それで一週間と限るのも何ですから、まあ十日といふ事にしてお貸しませう。」といふことになりました。

私は思の**外事が容易に運んだので安心しましたが、實に日本といふ國なればこそ、皇居といふ一聲で、私の名も所も聞かないで有難がつて、お役に立つものなら立てて下さいと、誠の心を動かして來た心持は全く、他國の人の眞似の出來ぬことであらうと、非常に私も嬉しく感じたことでありました。**

五 無線電信の發明



マコルの實驗

寒い北風がひゆうひゆうと吹きすさぶ冬のある日のこと、いづれも二十五六の血氣盛りの三人の青年が、加奈太の東極端セントローレンス灣の口を扼するニューファウンドランド島の東海で、烈風に乗じて細い針金を附けた凧を飛ばしてゐたが、風が餘り強過ぎるの

て、何度となく針金が切れて、凧は海の彼方へ吹き飛ばされてしまつた。この針金の一端は、何か知らんがある不思議な器械に繋いである。燈臺の老信號手は、變な事をする物好な若者どもだといふ風に、彼等のすることを傍觀してゐたが、暫くたつてから向ふに見える燈臺の方へ歸つてしまつた。

三人の青年は老信號手が歸つた後も、熱心に凧を揚げて見たが、風が強過ぎた爲に、その日はとうとう目的を達することが出來ずに、暫く厄介になつて居る燈臺へ引き揚げた。その翌日もやはり器械と針金と凧を持ち出して、前の日にやつた通り、凧を揚げては何事かを試験し始めた。この日は前の日とは違つて、風もそれほど強くはなかつたので、三

人は一心不亂にこの仕事を繼續した。

ところが間もなく器械の側の卓子によりかかつて、器械から連續してある電話の受話器を耳にしてゐた瘦形のり

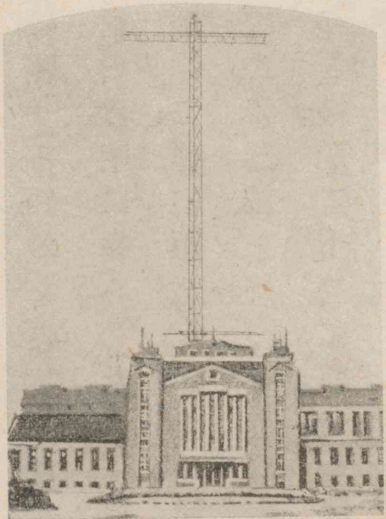


ニコルマ

りしい青年は、思はず「おいおい、來たぞ來たぞ、確に成功した。とんとんとんと三つ響いて來たぞ」と、連の二人の助手を顧みて微笑した。

微笑した青年は、誰あらう無線電信の發明者として後に天下に有名になつたマルコニで、二人の連はイギリスの本

コーンウォール
英國イングラン
ド西南端の海岸



局信電線無ンエウナの大最界世

土から連れて來た助手であつたのである。西曆一千九百一年十二月十二日の午前十一時三十分に、ちやうど二千哩を距てるイングランド、コーンウォールの海岸から、大西洋を横斷して波及して來た無線電信の電波がある装置を行つた件の風を感じ、地上の器械に傳はつて、さうして首尾よくマルコニの耳に響いて來たのである。彼はこの時二十七歳であつた。マルコニがかくの如く獨逸の物理學者ヘルツが發見した電波をして空中を通じて電信の用を爲さしめるまでには實に七

ヘルツ
(西紀一八五七—一八九四)

年の辛酸を嘗めたのである。彼はイタリーのボロニヤの生れて、幸にも富裕でさうして賢明な父を持つた爲に、容易にボロニヤ大學に入學したが、彼はこゝで貪るやうに電波に關する知識を吸収し、さうして大學生時代に既に無線電信の發明に腐心したのである。彼の創作した器械で、とにかく二哩の距離を隔て、通信が出来るやうになつた時、彼はこの器械を持つて母の生れた英國へ渡つた。それはやつと彼が二十二になつたばかりの時であつた。それから幾多の苦心を積んで、今世紀第一年の十二月、大西洋横斷の電信が出来るやうになつたのである。

その後無線電信電話が漸次に發達して、今日では大陸と

大陸の通信はいふまでもなく、軍艦・汽船・飛行機に至るまで、いづれも無線電信電話の器械を備へつけるやうになつた。あゝ人類はこの發明によつて、どれほど恩澤を蒙つて居るであらうか。

— 渡邊忠吾の文に據る —

六 我が國の特徴

山 崎 延 吉

山崎延吉
石川縣の人
教育家

我が國は四方海を以て圍繞された島國であり、土地の八割は山岳であつて耕地に乏しく、形は、狹少で寒帯より熱帯まで延びて居る國であり、櫻の花と富士の秀嶺を誇りとする國であり、火山に富める國でもあることは、何人も認めて以て我が國の特徴とする所であらう。

特に萬世一系の皇統の統治し給ふ國であり、神ながらの道を信ずる大和民族の住する國であり、歴史あつて以來外侮を受けた事のない誇りを有する國であり、皇統三千年、連綿として彌榮え櫻給ふ皇室を戴く世界唯一の國家であることは、我が國の最大の特徴として富等しく世界の認めてゐる所である。土地と氣候、即ち地理的關係と、その國の歴史とは國民性を造るものであるから、我が國民性は我が國の特徴の權化であり、他國の擬して及ぶ能はざるところである。



大和民族として、皇國の臣民として、帝國の國民として、世に立つ吾等は、飽くまでも我が國の特徴を悟らねばならぬのである。

由來、我が國民は昔から精神生活を貴び、靈に生きることが面目とする。我が國民は精神主義であることに長所を有する國民である。故に支那の儒教がよく消化され、印度の佛教が我が國に入つて甦り、西洋の基督教も我が國に於てその光彩を放つことが出来たのである。切腹が珍重され、敵討が武士の面目と貴ばれ、義に勇んで生命を惜まなかつた習俗も生まれたのである。

物を比較的粗略にし、形式を見る事を侮り、財貨に對する

慾を汚きものと解釋し、物を貴ぶを下卑たこととして排斥した爲に、科學の知識を缺き、發明・發見に劣つてゐるのは、確かに我が國民の短所である。又物に飽き易く、實行の習俗を見ることの出來ぬのも、亦我が國民の缺點である。

採長補短の精神に依つて、その短所を補足し、その長所を助長せしむるのは可い。併し短所の補足に急なるの餘り他の短所まで採用して、己の長所を没却するが如きは、全く我が國の國體と國民性との面目を傷つくるものである。その弊の甚だしい時は、我が國民が漸次威信を國際間に喪ふことになるのである。吾等は此處に目覺むることが必要である。

——世に立つ道——

矢崎千代二
横須賀市の人
洋畫家

七 繪の旅

矢崎千代二

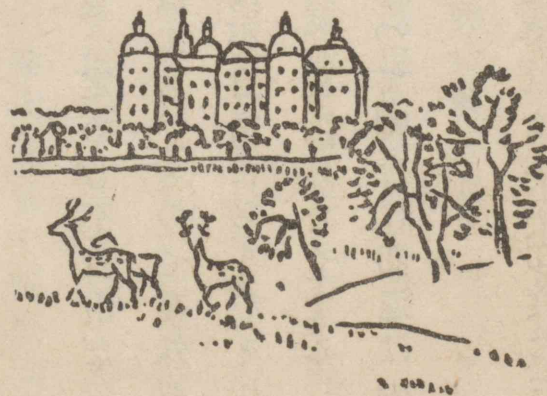
一 啞で聾

言葉がわからねば啞で聾である。定めし不自由だらうと同情されるが、慣れるといふ事はえらいもので、存外不自由でない。手一本不足したら、初は不自由だらうが、それを補ふ爲に他の部分が發育して思つた程困らなくなる。言葉がわからなければ感じがよくなつて、割合に間違は少いものである。

どこの言葉でもできるに越した事はないが、印度に三年、支那に二年、南洋に半歳、今は巴里にゐるが、これから先どこ

へ往くともわからぬ身で、骨折つて一國の言葉を覚えても
 又すぐ不用になるとあきらめて
 相變らず啞で通して居る。勿論
 困ることは度々あるが、随分をか
 しい事もある。

獨逸の山の中などで生まれて、
 異人種を見たことのない田舎人
 の、何か口をきいて見たさに考へ
 出す事は、大抵何時だかね。と時刻
 をきく事であるから、いつも無言で時計を見せるが、時には
 他の事をきかれて時計を見せて笑はれる事もある。



(筆二代千崎矢)

苑鹿のヒルブツェリモ

ドレスデン
 ドイツ、サキソ
 ニーにある人口
 約五十五萬の都
 會

この前ドレスデンで、珍しさうについて来る四五人の子
 供が、今度は先に立つて案内するから、どこへつれて行くか
 と物ずきにもつれて行くまゝについて行くと、御親切に中
 央停車場の通譯の詰所へ引張り込んだ。そこでは世界中
 の言葉が通じると言ふのだが、生憎日本語は通じない。
 都會の電車路などの人通りの多い場所で、寫生して居る
 と巡査が来て文句を言ふ。相手にならず居ると、中には
 耳が遠いと思つて、耳のそばに口をよせ一つ事をくり返し
 くり返し言つて居る。こゝで寫生してはいけないといふ
 のだらうとわかつて居ても、言語不通を幸に、ごて〜やつ
 てゐるうちに、晝の方は出來上つてしまふ。これは不通の

一得である。

二 見物人の親切

ロンドン税關裏の河岸で、十二號大の畫布を畫架に立てて畫いて居ると、さつと吹いて來た風に畫架もろ共描きかけの畫布は河の中へ吹き飛ばされ、折柄の退潮に乗つて流れて行く。見て居た人たちは洋傘やステッキを揮つて追つかけてくれるが短くて届かない。その中に向ふ河岸の小舟を呼んでくれると、船頭さんが早速漕ぎつけて岸へ揚げてくれた。いくらかやらうとすると、それに及ばないといつて漕ぎ出してしまふから、一シルの銀貨を舟の中に投げ込んでやつた。

一シル
約五十錢

サキソニー
ドイツ南部の自由國

パレット
繪具板又は繪具皿

サキソニー・スキスの山の中で谷川を見下ろして、やはり油で畫いてゐると、背負籠を背負つた通りかゝりの小娘が、只一人始めから見て居た。その時、生憎解き油の揮發油の無くなつたのを見ると、小娘は黙つて油壺を取るから、何をするかと思つて見てゐると、はるか下の谷川まで行つて水を一ばい入れて歸つて來て、又黙つてパレットにさし込んで得意の微笑をもらしたのである。揮發油を水と思つて居たのであつた。

巴里郊外の雪の中で寫生して居ると、男の子供が傍の百姓家の板塀をメリメリこはしにかゝるから驚いて見てゐると、その破片を積んで火をつけてそれで煖まれといふ親

エルベ河
ドイツ中部を流
れてゐる河

切であつた。



(筆二代千崎矢) 畔河ベルエ

踊を見るやうに揃つて歌ひ舞ふのである。四つか五つの
小さい妹も手を揃へて踊る。

三 世間のいろく

エルベ河の日の暮であつた。

向ふに王宮を見て月見草の咲く
川原の草の中でかいてゐると、四
五人の少女が寄つて来て「うちは
遠いのか。ときくから、遠いのだ。」と
答へる。すると、淋しからうから
踊つて見せてやる。」といふ事で、盆

寫生の七つ道具を携帯してロンドンの市街あたりの自
動車の中を抜けるのは骨が折れる。時には巡査が片手に
道具を持つて、片手でこ
ちらの腕を抱へ込んで
渡してくれる。巡査は
大きいから吊りさげら
れて足が地につかない。
はたから見たら日本人
が悪い事をして捕へら
れて行く様であらう。道をきいても巡査が手をとつて連
れて行つてくれる事がある。巡査でない人にきいても、數



(筆二代千崎矢) 査巡のンドンロ

町の遠方をわざ／＼送つてくれる事がある。

かいてゐる中に「それはいくらで賣るか。」と訊くものは極めて多い。その態度もいろ／＼である。ひやかしもあり、本氣のものもある。アメリカの旅行者などは一種の挨拶位に思つて居るから、皆一様に「賣らないのだ」と斷るが、中には「何故賣る事が出来ぬか。」と議論をしかける者もある。さういふ者には無代で進呈したいと思ふ。汽車の中で肖像をかいてくれとせがまれる時には、スケッチブックの色鉛筆でかいてやるが、四五人の時は互に先を争つてゐる間に汽車はつく。御禮に名刺を出して「日曜に遊びに来てくれ。」といふのが例である。

—繪の旅から—

八 獨逸の少年

池田宣政

池田宣政
東京市の人
少年物作家

トーマスクック
會社

本店はロンドン
にあり世界各地
に支店をもち旅
行者のために便
利をはかる會社

ヨーロッパの大都會を短い時日の間に見物するに一番便利なのは、トーマスクック會社の見物乗合自動車を利用することである。無蓋の四十人乗の大型自動車で、案内者が一人付いてゐる。非常な速力で市内の名所から名所を走りまはつて、案内者が英語・獨語・佛語で説明してくれるのである。

ベルリンに着いた翌日、私はこの自動車の一席を占めて各國の見物人と一緒に市中を見物したのであつた。車がウンテルデンリンデンの大街路に止つて、案内者が

ウンテルデン
リンデン
ベルリン第一の
繁華な街路

リンデン
菩提樹

説明してゐた時の事である。リンデンの木蔭に遊んでゐ



(一のそ) ンデンリンデルテンウ

たドイツ少年達は、外國人珍しさに自動車の周圍に駆けよつて來た。大戦後の事とて、少年達の服装は見苦しかつたが、その顔には男らしい負けじ魂が現れてゐた。淺黒い陽に焼けた顔色、人の心を刺通すやうな鋭い瞳、きつと結んだ唇。さすがはドイツの少年だなと私は彼等の様子に見惚れて

ゐた。

すると、その中の十二三歳の一少年が私に近づいて來て、

「どうぞ、日本の御方。」

といひながら、小さな手帖を差出した。これまで各地を旅行する間に、少年達から署名を求められたことは度々あつたので、私はその手帖を受取つて、自分の萬年筆で、

「池田宣政、日本、東京。」

とわざと日本字で認めてやつた。

すると、横あひから、フランスの若い男が、

「私も書きませう。」

といつて、笑ひながら、その手帖と私の萬年筆を取つて署名した。

「私どもも書きませう。」

とカナダから来た老夫婦も署名した。かうして汚れた手帖と、私の万年筆は乗合の笑聲の中に、彼方此方と人々の中を渡つていつた。私は、私の万年筆が諸外國人に使はれるのを何となく嬉しく感じてゐた。といふのは、この万年筆は外遊の途に上るに當つて、親しい友が心を籠めて贈つてくれたもので、材料といひ、細工といひ、裝飾といひ、又その使ひ心地といひ、實に申分なく出来た日本品であつた。

ふと氣がつくと、自動車は何時の間にか走り出してゐた。ハッと思つて振りかへつて見ると、彼の少年はもう五十間ばかり後で、大聲に何か叫びながら、兩手を高く擧げて振つ

てゐる。その手に見える白いものは手帖であらう。けれども万年筆はどうしたのか。その行方を尋ねるのも失禮の至りと思つて、そのままにしてしまつた。かうして愛用の万年筆は失はれた。

それから三年は過ぎ去つた。或日、偶然つひぞ知らぬ外國婦人の手紙と一封の小包郵便を、日本に歸つてから受取つた。不思議に思つて、小包を開くと、中から丁寧に紙に包んだ万年筆が現れた。「おや」と夢かとはかり喜んだが、併し鞘は散々に破れ、ペンは歪んで、碌な字は書けなくなつてゐた。私は愛兒が大怪我をして歸つて来たやうに驚き且つ失望した。

失望しながらも、ともかくもと手紙の封を切つて見た。ドイツ文字で細かく書いた長々しい手紙であつたが、讀んで行く中に、覺えず私は眼瞼の熱くなるのを感じた。ひとりに涙が頬を傳うて來た。

文意をわかりやすく翻譯すると、かうであつた。

『見も知らぬ私から突然手紙を差上げて御不審にお思ひでせう。又こんな下手なわかりにくい文字で嘸御迷惑でせう。』



(二のそ)ンデンリ-ンデ-ルテンウ

けれども、私は最愛の息子がこの世の息を引取る間際まで、氣に掛けてゐたあなたの萬年筆に就いて是非申上げねばなりません。

私は、あなたが三年前に、ウンテルデンリンデンの木蔭で、萬年筆を貸して下さつたカールと申す少年の母親です。カールは死にました。そして死ぬ時まであなたの萬年筆の事を心配してゐました。いゝえ、その萬年筆の爲に死んだやうなものです。

カールは私の季の息子でした。兄達は一人はイギリスに、一人はオーストリアに働いてゐます。父親は大戦中、お國の爲にフランス國境で戦死を遂げましたので、母子

二人で貧しく暮してゐました。

カールは良い子供でした。親切で孝行な子でした。學問も好きでした。私はどんなにあの子の行末を楽しみにしてゐた事でせう。そのカールは死にました。あゝ最愛のカールは、あなたの万年筆をお返ししようと色々苦心して、三年後の今日、漸くあなたの住所を知る事が出来て、お返ししようとして、外へ出た時、自動車に轢かれてしまつたのです。

けれども、カールは死の瞬間まで、本當のドイツ人らしく、正直で、立派でした。

カールはあなたから万年筆を借り放しにした事を非常に残念がつてゐました。あなたの自動車が急に走り出した時に、喫驚して後を追つたさうです。けれども間に合はなかつたさうです。

家に歸つて、カールはその事ばかり心配してゐました。

「ドイツの少年は不正直だ、他人の物を横領したと日本人に思はれるのは、死ぬよりも恥辱だ。否、僕だけの恥ぢやない。ドイツ少年全體の恥だ。私はどうしてもあの日本人にこれを返さなければならぬ。」といつて、毎日街へ出て、あなたに再び遇はうとしてゐました。

容易にあなたに遇へませんでした。あなたの署名は日本字であつて、私共には讀めませんので、カールは街

を通る日本人に讀んでもらひました。その日本人は手帖を見て、「これには唯日本、東京とあるから住所はわからない。大使館で尋ねたらわかるかも知れない。」と教へましたので、カールは大使館を訪ねましたが、だめでした。大使館から歸つて來たカールは、「あの池田といふ日本人は、僕のことを何といつてゐるだらう。」



獨逸少年の達

「いゝや、ドイツ人の事をどんなに悪く思つてゐるだらう。」

といつて、口惜涙を流してゐました。あの子の性質としては無理もないと、私も一緒になつて残念がりました。あなたの住所を見出す手段には、私もカールも全く困つてしまひました。所がどうでせう。カールはとうとうあなたの住所を探し出したのです。或日、カールは狂犬のやうにすさまじい勢で家へ飛込んで來ました。そして、

「お母さん、わかりました、わかりました。」

といつて泣いて喜びました。カールが熱心にあなたの住所を探してゐることは、學校でも、教會でも、お友達の間でも大評判で、親切な人達は一緒になつて探してゐてく

れました。中でも一番熱心なヨハンといふお友達が、「ドイツ少年の名譽の爲に一緒に探す」といつてゐましたが、この少年がとうとうあなたの住所を「海外の友協會」の名簿中に発見したのでした。

早速私達は萬年筆の小包を造りました。そしてカールはヨハンと一緒に小包を抱へて家を飛出しました。私は微笑を以てその後を見送りましたが、二人が戸口を出たかと思ふ時に、ビューと不吉な警笛が鳴りました。

暫くすると、どさくと階段を上る人々の重い足音がして、荒々しく戸を開いて二三人の大男が入つて來ました。私は一目見てアッと後へ倒れました。

人々に頭と足を支へられて、擔ぎ上げられて來たのは、二三分前に喜び勇んで、兎のやうに快活だつたカールなのでした。喜の餘りに向ふ見ずに街に飛出した出會頭に、自動車に轢かれたのでした。

私は床の上におろされたカールの身體に取りすがりました。青白い顔、眞紅な血。醫者の手當のかひもなく、カールは刻々白蠟のやうに青ざめて行きました。「すみません、お母さん、ゆるして下さう。」



さういつて、目を閉ぢましたが、又、

「萬年筆……小包……出して下さい……ドイツ少年の名譽……お母さん。」

これが彼の最後の言葉でした。

こゝまで来ると、手紙の文字は怪しく亂れて來た。そして最後に、カールの心中を可愛さうと思ふなら、同封した彼の寫眞に接吻して、あなたの寫眞と一緒に送り返してくれと書いてあつた。

——輝く凱旋隊——

九 海舟の苦學

山路愛山

山路愛山
名は彌吉
静岡縣の人
史論家
大正六年歿（年
五十四）

勝海舟は若い時から、非常な勉強家であつた。ある日の

こと、勝さんは書物を見に本屋に出かけて、其處に新しく舶來した和蘭の兵書を見出した。「是は珍しいものだが價額は何ほどか」と尋ねると、「五十兩でございます」との返答。その頃の勝さんには五十兩などと云ふ大金は思ひも寄らない事であつた。しかし勝さんはそれが欲しくて耐らぬので、その日から早速金の工面に取掛り親戚などを飛び廻つて辛うじて五十兩の金を作り、やれうれしやと喜び勇んで、本屋へ往つて見ると、その本はもう他へ賣れましたと言はれたので、掌中の珠を失つたやうに大いに落膽し、それは弱つた、一體誰に賣つた」と尋ねると、「さうでございます、四谷大番町に御住ひになります與力某様に賣りました」と言ふ。

四谷大番町
今の東京市四谷
區大番町

その頃の與力には内福の人が多かつたからこんな高い本も手に入れたのであらう。

勝さんは、さうかと言つて、すぐその家を訪ねて、あなたの御買求めになつた本を、是非私に御譲り下さい。私は十幾日掛つてやつと金を拵へました。が本屋へ往つて見ると、あなたが買つて了はれたと言はれて失望して了ひました。どうか私に賣つて下さい。」と事情を打明けて頼んだ。ところが、それはいけません。私も讀まうと思つて買つて來たのだから、御賣り申す譯には行きません。」と言ふ。是も尤もな事でありますから、それならば是非暫時の間拜借願ひたい。」と言ふと、それは尙なりません。」と言ふ。それでも勝さんは中々屈しない。「それならば晝間は御讀みになるから御入用でございませうが、夜分御寝みになつた後は御入用もなからうから、その間だけ御貸し下さい。」といひ出した。この非凡の根氣には先方も驚いたと見えて、それならば四ツ時(今の十時)過ぎには寝ますから、それから翌朝までならば御貸し申さう。しかし、家の外へ持出されては困る。家へ來て讀んで下さい。」と言ふので、その日から毎晩勝さんはその家へ通つて、根氣よくその本を寫し始めた。その時分の蘭學書



舟 海 勝

九 海舟の苦學

本所
東京市本所區

生は、書が稀であつたから大概寫して勉強したものである。本所の家から四谷の大番町まで一里半もある所を、毎晩通ひ、半年もかゝつて漸く全部寫し終つたと云ふことである。その書の中に往々意味の分らぬ所があつたので、

筆蹟

大智大勇、必能、
忍、小耻、小念、
海舟



海舟筆蹟

勝さんは、
或日その
持主にこ

れを質すと、與力は仰天して「私は持主ではありませんが、まだ読み切りませんのに、あなたは寫しながらもう其所まで御讀みになりましたか。御精根の程實に驚き入りました。誠に感服の次第でございます。就いては私のやうな者が

この本を持つて居ても益の無いこととありますから、あなたに進上致します。」と言ひ出した。勝さんは、「いや私はもう寫しましたから二冊は入用は有りません。」と言つたが、是非に受けてくれといつたので貰つて來て、後にこの寫本の方を賣拂つたが、一部八冊の書物で三十兩に賣れたといふことである。多分勝さんの二十二三歳頃のことであらうが、驚くべき勤勉であつたといはなければならぬ。——勝海舟——

一〇 舟路

島崎藤村

海にして響く艦の聲
水を撃つ音のよきかな



島崎藤村
名は春樹
長野縣の人
詩人

大空に雲は飄たふひ

潮分けて舟は行くなり

静かなる空に透かして

青波の深きを見れば

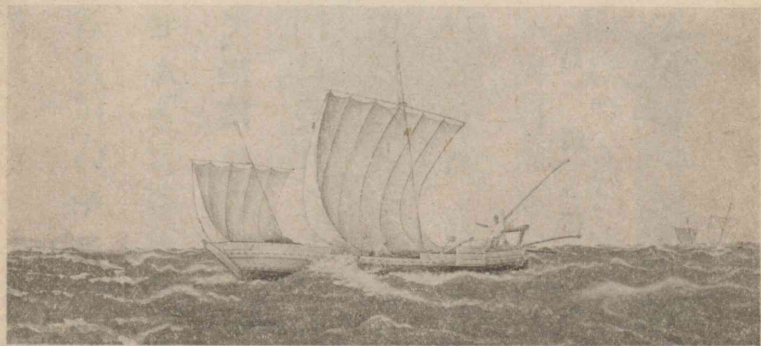
水底やはてもしられず

流れ葉の浮きつ沈みつ

緑なす草のかげより

湧き出づる泉ならねど

おのづから満ち来る潮は



海原のうちうちに溢れぬ

さながらに遠き白帆は

群をなす牧場の羊

吹き送る風に飼はれて

わだつみの野邊を行くらん

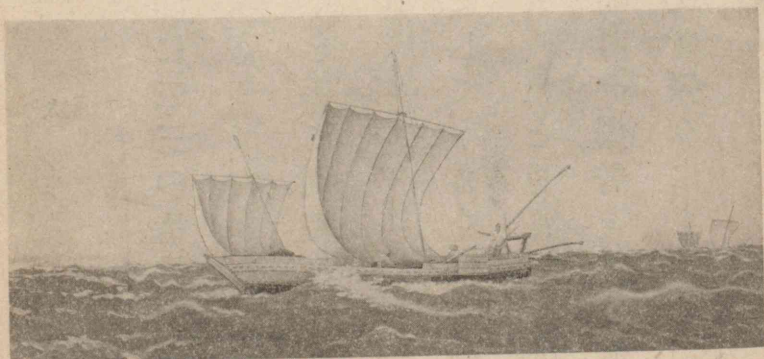
雲行けば舟も随まひ

舟行けば雲もまた追ふ

空と水相合ふかなた

諸共にけふの泊へ

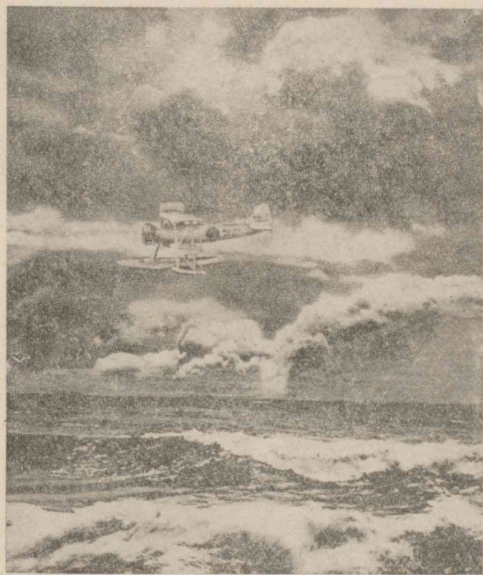
— 落梅集 —



久米正雄
長野縣の人
文學者

一一 空の旅

久米正雄



飛行機の勇姿

いよゝゝ我等がドルニエー機の前に二三の格納庫員が進み寄つて、大きなプロペラーを手で廻轉し始めた。グルッグルッ空轉一度にして、うまく發動機に點火したと見え、機は今や凄まじい爆音と共に、最初の武者振ひにも似て身體を顛はし始めた。それが我等の身にも傳はる。

白秋
北原白秋
詩人
新野
新野百三郎
一等飛行士

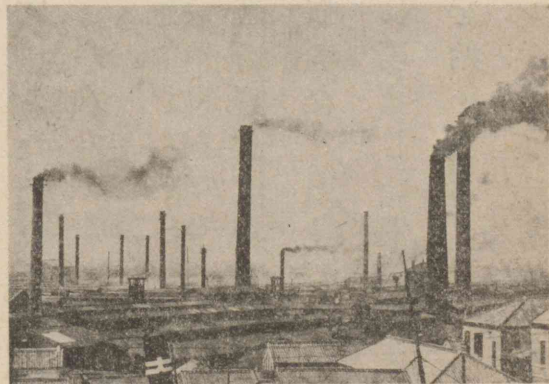


陸 離

いよゝゝ機は動き始めた。見ると、すぐその機翼の所に、昨日白秋君を乗せて來た新野君が、例のギリシヤ勇士の様な顔附で、他の庫員と共に、機首を場の中央へ向けるため翼の支柱を押しへてゐる。ツツツツ地を擦つてやがて機首は目指す方向へ向き直つた。と、新野君は身を放して、両手を高く振つた。出發の合圖だ。もう一度更に凄まじい爆音、機は忽ち前進滑走を始めた。

振られる。私達のハンケチも今は裂けよと振りかざされる。機側は既に風をきつた。人々の姿は見る見る後に。さらば大阪よ、我等は一路東を目がけた。雲際縹渺の彼方へ、一機首は既に生駒をさしてゐた。やがて、煙都は後の濛氣の中へ薄黒く抹消し去られた。機は今や千米に近い高度を定めて、大阪の東郊を一直線に翔驅してゐるのである。

私は地上にゐた時、大大阪の都市的發展は、郊外電車の發

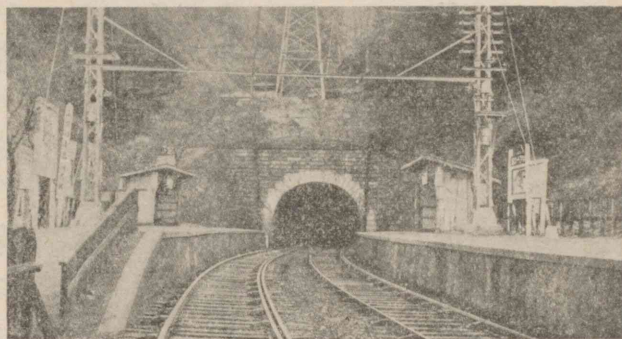


都 煙

生駒
生駒山
大阪府と奈良縣との境

達と共に駭々として郊外を埋め、蜘蛛手のやうに伸びて、森や畑を家で満たして餘地がないやうにひそかに想像してゐた。が、かうして天上から見ると、郊外はやはり青々と一色に彩られてゐる。水田が畦で色々の形に、區切られ、各、綠色を少しづゝかへてずつと並んでゐる。その處々に瓦屋根の家屋がゴチャ／＼固まつてゐる。白い道筋には、さすがに都市の餘波を見せて、必ず自動車走つてゐる。大軌電車の線路がその間を斜に縫つて、線路が赤茶けた錆色につゞく。

眼を遠く放つと、前方は生駒に限られてゐるが、その左の方は緩やかな山や丘が濃藍に煙つて、その間の平地から淀



生駒ノントネル

川が二三度屈曲して、ゆるりと流れてゐるのが見える。京都はもとより雲霧に包まれて望めない。晴れても見えないだらう。近畿の平野は思ひの外に廣くない。唯水田の多いのが豊饒な感じを與へる。機はその水田に蜻蛉のやうな影を落して、一氣に生駒の右肩を目がけた。

生駒はなか／＼馬鹿に出来ない山だ。大軌の線路が山麓の彼方でふつと消えてゐる。あの長いトンネルに入つたのだらう。我

河内
河内國(大阪府)

聖天様
大聖歡喜天

等も初めての山を、上げ舵を取つて飛んだ。右手には河内の山續き、高野の方まで藍鼠の山波が見える。ふと氣づくとき、見送りのブレゲー機がその藍鼠の山波の上を、濃鉛色の翼を伸べて程近く雁行してゐる。が、暫くすると、だん／＼後れて、やがて見えなくなつた。

生駒程の山でも、山にかゝると、機體にちよつと揺れがくる。少くともくるやうな氣がする。山の形なりに風が吹くからださうだ。僅だが、前進してゐる機が時々すつすつと落される。ランチに乗つて波を越える時位の感じであつた。最初のこの上下動に逢つて、私も少し氣持がよくなかつた。が、生駒は無事に裏へ越えた。聖天様を祀つた中腹

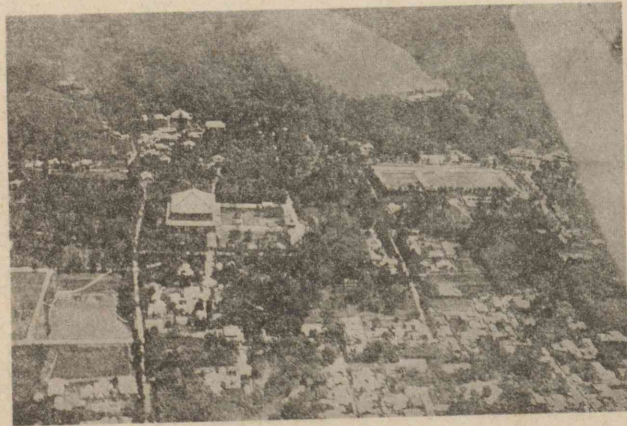
と、ケーブルカーの上り路とが、左に斜走して見える。大軌の線路が、その下あたりから又電柱の毛を植ゑて續く。いよゝゝ大和平原だ。春ならば菜種咲く慕はしの大和平野だ。今はやはり緑一帯。奈良が心なしか、古色を帯びて見える。大軌の豆電車が、それでも一所懸命に走り着かうとしてゐる所が奈良市に違ひない。

猿澤の池が薄黄色く濁つて、盆景にしては汚いが、その傍の五重塔は、まさに箱庭の置物だ。猿澤の池と並んで、更に池を圍みながら、奈良ホテルその他の建物が見分けられる。が何よりも、中央に奈良を統べる如く大きく目に立つのは、大佛殿の大屋根だ。之だけは同じ置物にしても、確に他と

猿澤の池
奈良市興福寺山
門前にある

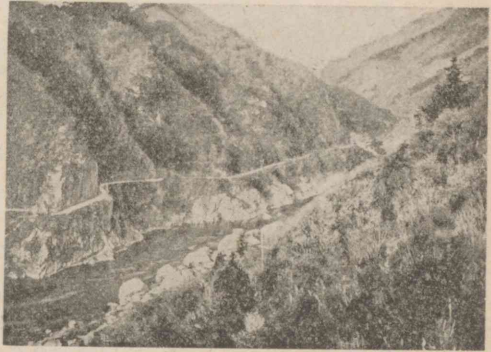
は比較にならぬ程大きい。若草山が牛の背をかゝめたやうに平たく見える。中腹の松が一二本、蚊鉤カマボコを植ゑたやう。そのあたりに點々と群るのは人らしい。鹿とは見分けられない。どうもをかした三笠山だ。かういふ古典的な山などは空中から見るものではない。

機は最早春日山を右に、若草山の眞上邊りを一氣に飛過ぎてしまつた。三笠山を越すと、たゞの山續きが、だんゝひだ襞深く



奈良市附近

木津の溪谷
山城國木津川の
溪谷



木津の溪谷

假の宮居を定められた笠置山には、お宮の屋根が見える。それにしても私は天皇がこんな深山に御さすらひ遊ばされたとは思はなかつた。

なつてきた。地上では、これ位から既に幽邃だとか何とか言ふだらう。木津の溪谷だ。静かな別世界のやうな温泉場が、溪流と橋とを前にして好もしさうに見える。笠置だ。

後醍醐天皇が

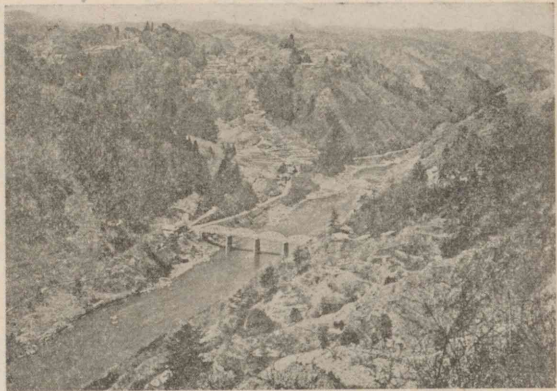


笠置山附近

月ヶ瀬
大和の梅の名所

鍵屋の辻

荒木又右衛門が
渡邊數馬の助太
刀をして河合又
五郎を討取つた
所



月ヶ瀬附近

チャンバラとを黙殺する。

機は懐古の餘裕も與へずに飛ぶ。更に木津の溪谷の上を、今は唯緑の凡峽月ヶ瀬の上を。——溪山を分離れて、今は伊賀の上野も瞬く間に横切らうとする。俳聖芭蕉を産したこの土地は、山中の小都會、三十八人斬の鍵屋の辻などは、もとより空中からは見えない。飛行機は歴史と

——東京日日新聞——

五十嵐力
米澤市の人
國文學者

一一 苺の味

五十嵐 力

初夏と梅雨とを思ふと、直ぐに私の心を躍らせるものがあります。

苺です！ 私は苺なしに、春から夏に越えることが出来ません。

水菓子の類の中で、私に取つて苺ほど美味しいものはありません。で、その培養には一番に骨を折ります。他の草木に一度か二度やる寒肥を、苺には三度からやるのも、その爲です。

五月から六月にわたる苺の盛りの二十日間は、私に取つて實に舌の御正月です。同時に腹の御正月でもあり、目の御正月でもあり、頭の御正月でもあります。朝早く起きて

雨戸を一枚繰る。寢衣のまゝ直ぐに飛び出して、跣足で朝露を踏んで苺畑に行く時の心持。莖の長い濃緑の厚い葉が、銀のやうな朝露に光つて、その間に眞紅の珠の見え隠れに連つて居るのを見た時の心持。脚は膝まで、手は二の腕まで葉末の露にひたして、丸々した紅玉を、草の枝から目籠に移す時の心持。一つの房に眞赤のから桃色、桃色のから白と尖頭とがになるほど段々小さくなつて、行儀よく鈴生りになつて居る、その中から、小さい、若いのをいたはりつゝ、本生りの大きい眞赤なのを摘み取る時の心持。摘み終つて、目籠めかごに山なす紅玉べにたまを携へつゝ、朝日に照らされて、足をすゝいで、家に入る時の心持。綺麗に洗つて、大きな古今里こいまりの皿に

盛つて、食卓に安置して、家内揃つて舌鼓を打つ時の心持。あゝ何といひませう。



(能久縣岡靜) 苺垣石

或人は文明とは家族一緒に卓を圍んで苺を喰ふことなり。と云つたと申しますが、私は百姓をやりつゝ、而して本を讀みつゝ、苺を喰ふといふことに於て、野蠻と文明と、土の趣味と天の趣味とを、同時に摺み得たや

うに思ひます。

苺は澤山取れますが、一々砂糖をかけて食べることは、と

ても私共の能くする所でありませぬ。それ故大抵は鹽をふりかけて食べます。それで非常に結構です。一週に一度位は破格に砂糖を添へます。一倍うまく感じます。稀には砂糖の外に牛乳を添へます。實に咽喉から佛になるやうに感じます。かういふ場合に、子供等は、頭が策になりさうだと云つて喜びます。何の事だか知りませんが、私の郷里では、非常にうまい物を食べた時に「頭が策になる」といふのです。

餘つた時にはジャムを作ります。ジェエリーも拵へます。又苺酒なども作ります。そして或はパンにつけて賞味し、或は夏時分の飲料に致します。

私の郷里
山形縣米澤市

私の苺畑は八疊間の三四倍もありませう。それで一春に、水菓子屋から買へば彼れ是れ十圓位に値する紅玉が取れます。その外に一昨年などは、春はその畦の間に甲州馬鈴薯を作つて二斗以上も取りました。秋は練馬を作つて相撲取の腕のやうな奴を百本以上も取りました。春の紅玉はその副産物として、外の茶褐玉と秋の雪白根とを與へて呉れるのです。

美味い話ばかりして、ついその出處を言ふのを忘れて居りました。私が、私の苺は六年前に余丁町の坪内先生から戴いて、片手に軽々と提げて來た、それが蕃殖して今日の隆運を來たしたのであります。

余丁町
東京市牛込區
坪内先生
坪内逍遙

——野草集——

一三 尊徳先生の教訓

一 國の恩祖先の恩

ある村の金持の農家に、利口な子供が一人あつた。東京の聖堂に入れて修業させたいといふので、父子連れ立つて來て、暇を告げた。自分はこれを諭すのに心を盡くして、いつたのである。

「それはよいことである。しかしながら、お前の家は富農で、多くの田畑を持つてゐると聞いてゐる。とすれば尊い株なのである。その家株を尊く思ひ、先祖の高恩をありがたく心得て、道を學んで、近在の村々の人々を教へみちびき、

自分
尊徳先生

その土地を盛んにして、國の恩に報いるためにその修業に出るのならば、まことによいことであるが、先祖からつたはつてゐる家株を、農家であると思つていやしんで、むつかしい文字をならつて、たゞ世の中に誇らうとする心ならば、大きな間違ひであるといはねばならぬ。

いつたい農家には、農家のつとめがある。金持には金持のつとめがある。農家であるならば、どれほどの大家であらうとも、農事をよく心得てゐなくてはならない。金持はどれほどの金持でも、勤儉して、餘つた財を譲つて、郷里を富まし、國恩に報いなければならぬのである。

この農家の道と、金持の道とをつとめるためにする學問

ならば、まことに結構であるけれども、もしさうでなくて、先祖の大恩を忘れて、農業はいやであるとか、農家はいやしいとか思ふ心で學問すれば、その學問がいよゝゝ放心の助けとなつて、お前の家は滅びること疑ひないのである。

今日の決心は、お前の家の立つか滅びるかといふことに關する。迂濶にこれを聞いてはならぬ。自分のいふことは決して道理に違つてはゐない。お前が一生學問をしたところで、かうした道理を發明することは、出來ないにきまつてゐる。またこのやうに教へたり、誡めたりする者もきつとないにきまつてゐる。聖堂に積んである萬卷の書物よりも、自分のこの一言の教訓の方が尊いであらうと思ふ。

自分の言葉を用ゐれば、お前の家は安全であるが、用ゐなければ、お前の家の滅びるのは眼の前すぐのことである。

それだから、用ゐるならばよい。用ゐることが出来ないならば、二度とこの家に來てはならぬ。自分はこの土地の廢亡を、興復するため來てゐる者であるから、滅びるといふことは、聞くだけでもいやなのである。きつと來てはならぬぞ。

さう誠めたのであるが、それをいれることが出来ないで、東京に出たのである。すると、まだ修業も出来ない中に、田畑は皆他の家の持物となつてしまひ、遂に子は醫者となりし、親は手習師匠をして、今日をすごすやうになつたと聞い

てゐる。實に痛ましいことではないか。世間にはこのやうな心得違ひの者が、時々あるのである。

自分がその時、ひよいとよんだ歌に、

ぶんぶんと障子にあぶの飛ぶみれば

明るき方に迷ふなりけり

さういつたことがある。實に痛ましいことではないか。

二 遠きを思ひはかれ

遠きを思ひはかるものは身代をよくするが、近いところを思つてゐる者は貧乏する。遠きをはかるものは、百年の松杉を植ゑる。まして春植ゑて、秋實るものに、そのある筈がない。だから富有なのである。近きをはかる者は、春

植ゑて秋實るものまで、なほ遠いことだとして植ゑない。たゞ眼の前の利に迷ひ、蒔かないでとり、植ゑないで刈取るやうな事ばかりに眼をつける。だから貧窮するのである。蒔かないでとり、植ゑないで刈るやうな物は、眼の前では利があるやうでも、一度とる時は、二度刈ることが出来ない。蒔いてとり、植ゑて刈る物は、毎年々々つゞいて盡きるといふことがない。故にこれを無盡藏といふので、佛の道で福聚海といふのも、また同じである。

三 家を見て人を見かける

自分がある村を見まはつた時、惰弱で掃除をしない者があつた。其を見て自分は、「汚くしておくことがこのやうで

は、お前の家は、永く貧乏神の住居となつてしまふぞ。貧乏でなくなりたいと思つたら、まづ庭の草をとり、家を掃除するがよい。このやうに不潔にしておく時は、また疫病神も宿るにきまつてをる。よく心掛けて、貧乏神や疫病神がゐられないやうに掃除するがよい。

家に汚い物があれば、糞蠅が集つてくるやうに、庭に草があれば、蛇や毒虫がこゝぞと思つて住むものである。肉が腐れば蛆がわくし、水が腐れば子子がわく。だからして同じやうに、心や身體を汚くしておく、と罪や咎が生まれてくるし、家が汚いと病氣が出来るから、恐れなくてはならぬ。」と諭してやつた。

また一軒家が小さくて、内も外もさつぱりと綺麗にして
ゐるのがあつた。自分はこれを見て、この主人は遊び好
きで怠け者、亂暴なわる者、博徒の類であらう。家の内を見
ると、俵もなく、好い農具もない。農家にとつての罪人であ
らう。といつた。

後で村の役人に聞いてみると、果して自分の言の通りで
あつた。

―興民報徳夜話、福田正夫の譯文に據る―

三浦修吾

教育家

評論家

大正十年歿

(年四十五)

一四 朝顔の種

三 浦 修 吾

或日、私は朝顔の種子を鉢に蒔いた。残つた一握りの種
子を、私は垣根の隅に投散らし捨てた。そこは日の光のあ

たらない、じめく〜といつても濕つてゐるところであつた。
鉢に蒔いた種子は、芽を出し莖を伸ばして、夏の朝々、その勢
のよい青い葉の間に色の鮮かな大輪の花を開いた。



(筆光秋田吉)

朝 顔

鉢の朝顔が花をつけるやうに
なつた頃、私が種子を散らしたあ
の小暗い隅の土の上に、小さい芽
がいくつもいくつも出始めた。
それらは五寸位より長くは伸び
得なかつた。莖も糸のやうに細
く、葉も小さくて、やうやく徑一寸
程にしか開き得なかつた。

鉢の花がもう盛りをすぎた夏の終り頃になつて、不思議にも、その小さい莖は蕾をもつやうになつた。そしてその蕾が開くやうになつた。

私は驚異の思にうたれた。宇宙の生命の力のはたらかぬ隈もなき不思議さにうたれた。隙があつたら伸びられるだけは伸びようとする、生命の力の強さに驚かされたのであつた。開いた花は、一錢銅貨位の大きさをしかかなかつたけれど、それが小さいながらに、やはり鮮かな色を出してゐる。一所懸命の努力が、その小さな鮮かな色に隠れる所なく現れてゐた。

私は不運な境遇に生まれた人の子を思つた。彼等は、生

涯日の光を受けることが出来ない。鉢の中に移される時もない。人が眼をつけてくれることもない。それでも、與へられた限りの天分の力をいづくまでも展ばさうとする。私の眼には涙がにじんだ。そして私の心には、強い慰安と力とが湧いた。

鉢の中で大輪の花を咲かせてゐた、いはば時めいてゐた朝顔より、私にはこの小暗い垣根の蔭の小さい花の方が、幾倍にも可愛らしく、美しく、尊く思はれた。

—生命の教育—

一五 森の英雄

薄田 泣董

かぶと虫は森の英雄です。鋼鐵製の兜をかぶり、鋼鐵製

薄田泣董
名は淳介
岡山縣の人
詩人

の鎧を着てゐるそのどつしりとした押出しは、どんな虫に較べたつて少しも見劣りがしません。

私たちはこの英雄にめぐり會ひたいばかりに、朝早く森から森へとさまよひました。櫛や櫛やさいかちを見る度に、私たちは立止つて、その幹をゆすつてみました。ゆすられた樹の若葉は、くすぐられてもしたやうに聲高く笑ひさざめきながら、露の雫をはらくと頭の上に降りました。英雄は市中に少いやうに、森の中でもめつたに見つかるものではありません。私たちは、朝晩三日も續けて森の中を探し歩いて、たつた一匹のかぶと虫も見つからなかつたことがよくありました。そんな時には、別の手段を取る

より外には仕方がありません。それは、友達のもつてゐるかぶと虫を、黒砂糖の一塊と取りかへつこするのです。

鋼鐵製の兜を被つたこの小英雄がうまく手に入ると、私たちはいろんな繪具や金粉でもつて、その兜と鎧とを塗りました。そして木製の小さな箱を曳かせました。箱には紅毛人の好きさうな、血のやうな色をした肉桂水、金米糖、姉様人形といつたやうなものが、ごたく載せら



虫 兜

れてありました。昔々、都の大通を練りあるいた牛車のやうなゆつくりした足どりで、かぶと虫はえつちらおつちらそれを曳きずりました。

私たちが虫に對する態度は、大てい自分の遊び友達か、または家僕扱ひで、どうかすると、殘酷な目にあはせて喜んでゐましたが、唯一つかぶと虫に對してだけは、尊敬に近い感情を持つてゐたことをよく覚えてゐます。臺所からこつそり盗み出した砂糖の塊で砂糖水をこしらへ、それを持山の檜や檜の幹に塗りつけて、夕方それを舐めに來る筈の虫を探し歩いて、一匹も見つからない悲しさに、日がとつぶり暮れおちるまで、林の中に立ちつくししながら、

「かぶと虫一つ捕れないやうな山なら、いつそ爺さんの頭のやうに禿げてしまへ。」

と、心の中で叫んだことを今も忘れません。——太陽は草の香がする——

一六 夏の興趣

相馬御風

相馬御風
名は昌治
新潟縣の人
文學者

夏の花のうちで、私は第一に月見草を好む。月見草の咲く砂山には晝顔も咲く。眞夏の日光に照らされて、火のやうに熱くなつた砂原に咲いてゐる、あの淡紅色の花にはいひしれぬ淋しさがある。

畑の垣根につゝましく咲いてゐる白いさゝげの花も、私は好きだ。

黄色な蕊と紫の花弁とのよく調和した茄子の花も、懐か

しむに足る風情がある。

花夕顔は夢のやうな花だ。

この花は鉢植にして、電燈の

光で見るとにもふさはしい。

雑草の中に交つて、しをら

しげに咲いてゐるあの瑠璃

色をした露草の花も好まし



花夕顔

(橋本静水筆)

い。或年の夏、能登の和倉の磯山かげに、この花の群り咲いてゐるのを見たのが、今も忘れがたいもの、一つになつてゐる。

夏の夜の涼しさは、何といつても海邊が第一である。日

が暮れかゝる頃からは、避暑客な

どの來てゐない、このあたりの砂

濱でさへ賑やかになる。暗くな

ると、人々はあちらに一團こちら

に一團といふ風に集つて、焚火を

する。そして、その焚火で茶を煮

る。老若男女がその周圍で茶を

飲み話をする。それは多く漁師

の妻女達や老人達や子供達であ

る。沖には烏賊釣船の漁火が幾百となく竝んでゐる。海



海

上の漁火、海濱の焚火、いづれにも原始的な趣がある。

「沖の船の火はみんなていくつあるだらう」。焚火の周囲に集つた子供達の間から、時々こんな問が母親達に向つて發せられたりする。

さうかと思ふと、あの中のどれがうちの父つあ達の火だらうなあ。といふやうな情味の籠つた、いかにも子供らしい疑問まで持出される。

暗い海の上には、空のほの白い銀河が夜の更けるにつれて鮮かさを増す。涼しい風が水のやうに流れる。穏かな低い波の音が單調な中に限りない複雑さを藏してゐるやうに聞える。時には廣い砂濱の何處かで、冴えた聲の追分

節が歌はれたりする。冷たい砂の上に仰向になつて、私達は夜の更けるのも知らずに、星空の神祕に魂を奪はれてゐることがしばしばである。身内の冷えすぎたのに驚いて起きあがる頃には、磯の焚火もいつの間にか消えてしまつてゐる。そして、波の音が妙に淋しさをそゝる。沖の漁火だけは依然として燃えつゞけてゐるが、それさへも何となく淋しさうに見えるのである。

—第二の自然—

一七 國民の士氣と精神

徳 富 蘇 峯

「皇國の興廢此の一戦に在り」といふ一句は、三十餘年を隔てた今日でも、早鐘の様に、我等の胸に響き徹する。日本海

徳富蘇峯
名は猶一郎
熊本縣の人
貴族院議員
帝國學士院會員

の大海戦は、奉天の大會戦と共に、日露戦役中、最も目覺しい戦であつた。

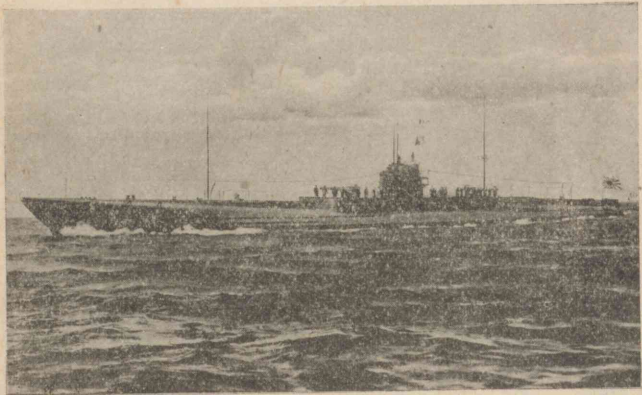


三笠艦の上の東郷大將

明治三十七八年戦役は、日本が二十七八年戦役に三國の干渉を受けて、我が勇士の血を流して得た遼東を、無念の涙を以て還附して以來、日本の全國民が、あらゆる辛苦を嘗めて待つてゐた好機會であつた。陸海軍の軍人ばかりでなく、總ての階級、總ての職業、總ての意見、總ての人々が皆舉つて、遂にその目的を果すことが出來たのであつた。

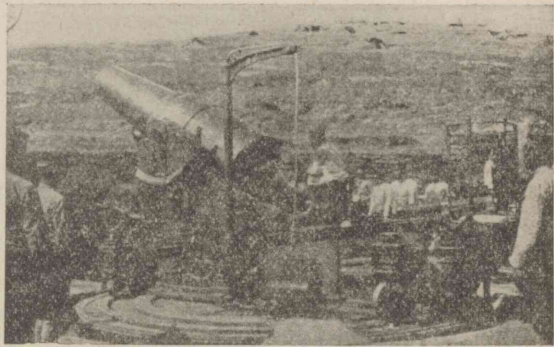
が出來たのであつた。

我等は日本海の大海戦に於て、我が海軍の士氣の盛んで



潜水艦

あつたことを思ひ、その戦功の赫々と輝いたことを憶ふ度に、我が帝國の海軍に信頼し感謝する心が湧き上つて來るのを禁ずることが出來ない。
この頃は軍備充實といふことが盛んに唱へられる。それは勿論大切なことである。しかしそれよりも、我等が大切と思ふのは、士氣とい



旅順攻圍軍の攻城砲

ふことである。いかに軍艦や大砲や潜水艦が澤山あつても、もしそこで働く人が一所懸命でなければ、その効果は少い。

日露戦争で日本が勝つたといふことには、色々の理由がある。しかしその中で最も確實で昭かであるのは、我が陸海軍の士氣が旺盛であつたことである。即ち日本海海戦に於ては、上は司令官から、下は一水兵に至るまで、打つて一丸となり、身を以て君國に報いんとした、勇ましき行動によつて、大勝利を得たのである。

黄海の戦

明治二十七八年
戦役中、日清兩國艦隊の大鹿島附近に於ける海戦
松島艦
日本艦隊の本隊六隻中の一
定遠
清國艦隊十隻中の一

諸君は知るであらう。黄海の戦に於て、松島艦乗組の一水兵が、十餘ヶ所の創を受けて、今將に死せんとする際、副艦長の過ぎ行くのを呼び留め、

「まだ定遠は沈みませぬか。」

と尋ね、副艦長が彼の耳に口を寄せて、

「安心せよ。定遠はもはや戦が出来ぬやうになつたぞ。」と

云ふや、勇敢なる水兵は、にっこり笑つて、

「どうぞ仇をうつて下さい。」

と叫び、最後の息を安らかに引取つたといふ話を。

敵の彈丸雨霰と散る中に立ち、勇敢に戦つた水兵は、赤き血潮を甲板に染めて、將に死せんとする時さへ、敵艦が沈ん

だかどうかを心配し、戦ひ難くなつた。ときくや、につこり笑つて、「仇をとつて下さい。」と叫んで息を引取つたといふ。これは日清戦役のことであるが、この士氣にかためられて來た我が海軍なればこそ、未曾有の大海戦に、露國の艦隊を全滅し得たのだ。

タンクや毒瓦斯の時代に、鎮西八郎爲朝の強弓も役には立つまい。航空機や潜水艦の時代に、源義經の八艘飛びも間には合ふまい。しかしどんな機械でも、どんな武器でも、最後の問題は、それを取扱ふ人間である。そして人間には上手もあり、下手もあり、熟練の者もある。しかし結局はその精神にある。

日本人の特色は、この精神、この士氣であつた。もし日本人がこの士氣を失はば、鹽が鹹さを失つたと同じで、何の役にも立たない。鹽が鹽として用を爲すのは、その味の鹹さのためである。

過去の諸々の國難を、我等の先祖はこの士氣精神を以て、征服して來たのである。しかも國難は過去だけではない。現在にも多い。更に將來はより多くあることを覺悟しなければならぬ。

國が盛んになるか、衰へるか、それは物質的關係によることも少くない。併し何よりも大切なのは、國民自身の精神である。今日軍備の充實も大切である。併し更に大切

なもの、國民の士氣と精神とである。我等は我等の祖先の光榮を辱かしめざる様努むべきである。――愛國讀本――

一八 朝が来た

千家元磨

千家元磨
東京市の人
詩人

朝が来た。朝が来た。

歡ばしく勇ましい朝が来た。

家々は競つて戸を開いて

美しい光を迎へてゐる。

戸外では寒い風が吹いて居るが、

喜び勇んだ人々は、

清い空氣の中に飛出して、

一人々々自分の道を

正々堂々と歩いて行く。

緑の空は歡ばしく開け、

太陽は光を強めながら、

高く――昇つて行き、

暖かくなつた地上からは、

威勢のいゝ喜の聲が、

太陽の光とともに

だん――強まり高まつて行く。

冷たい風はいつか消えて行き、

明るい歡は天地にみなぎり、

道行く人は夥しい群となり、
人々の顔は輝き、

その眼は

美しいものを見て居るやうに、

麗しく大きく清らかに見開いて、

深い慈愛があふれ、

希望の方へ勇んで行く。

おゝ勇ましく美しい朝よ。

太陽は等しく人々を照らし、

光を喜ばぬ人はなく、

天地は歡喜に燃えて居る。

—日本現代名詩集—

夏目漱石

名は金之助

東京市の人

文學者

大正五年歿（年

五十）

一九 鳥と猫

夏目漱石

主人の庭は竹垣を以て四角に仕切られてゐる。縁側と
平行して居る一邊は八九間もあらう。左右は雙方共四間
に過ぎぬ。今、吾輩のいはゆる垣巡りなる運動は、この垣の
上を落ちない様に一周するのである。

これはやり損ふこともまゝあるが、首尾よく行くとお慰
みになる。殊に處々に、根を焼いた丸太が立つて居るから、
一寸休息するにも便宜である。

今日は出来がよかつたので朝から晝迄に、三遍やつて見
たが、やるたびにうまくなる。うまくなるたびに面白くな

る。とうとう四遍くり返した。ところが四遍目に、半分巡りかけたら、隣の屋根から鳥が三羽飛んで来て、一間ほど向ふに列を正してとまつた。これは推参な奴だ。人の運動の妨げをする。殊に何處の鳥だか籍もない分際で、人の扉へとまるといふ法があるものかと思つたから「通るんだ。おい退き給へ。」と聲をかけた。眞先の鳥はこの方を見て、にや／＼笑つて居る。次の奴は主人の庭を眺めて居る。三番目の奴は嘴を垣根の竹で拭いて居る。何か食べて來たに違ひない。



猫
吾輩は猫である初版の本扉のトッパ

吾輩は返答を待つ爲に、彼等に三分間の猶豫を與へて、垣の上に立つて居た。通稱を勘左衛門といふさうだが、なる程勘左衛門だ。吾輩がいくら待つても挨拶もしなければ、飛びもしない。吾輩は仕方がないから、そろ／＼歩き出した。すると眞先の勘左衛門がちよいと羽を廣げた。やつと吾輩の威光に恐れて逃げるのかと思つたら、右向きから左向きに姿勢をかへただけである。

地面の上なら、その分に捨て置くのでないが、如何せん、只さへ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にして居る餘裕がない。餘裕がないといつてまた立ち留つて、三羽が立ち退くのを待つのもいやだ。第一、さう待つて居ては足が

續かない。先方は羽のある身分であるから、こんな處へは、とまりつけて居る。従つて氣に入れば、何時迄も逗留するだらう。こつちは是で四遍目だ。只さへ大分疲れて居る。況や綱渡りにも劣らざる藝當兼運動をやるのだ。何等の



猫

(筆石漱)

障礙物がなくてさへ落ちぬとは保證が出来ぬのに、こんな黒装束が三個も前途を遮つては、容易ならざる不都合だ。愈となれば自ら運動を中止して、垣根を下りるより仕方が

ない。面倒だからいつそさう仕らうか。

敵は大勢ではあるし、殊にはあまりこの邊には見馴れぬ人體である。嘴がおつに尖つて、何だか天狗の申し子の様だ。どうせ質の良いやつでないには決つてゐる。退却が安全だらう。あまり深入りをして萬一落ちてもしたら、猶更恥辱だと思つて居ると、左向きをした烏が、阿呆といつた。次のも眞似をして阿呆といつた。最後の烏が御丁寧にも阿呆・阿呆と二聲叫んだ。如何に温良な吾輩でも、是は看過が出来ない。第一自己の邸内で、烏輩に侮辱されたとあつては、吾輩の名前にかゝる。決して退却は出来ない。諺にも「烏合の衆」といふから、三羽だつて存外弱いかも知れない。

進めるだけ進めと度胸を据ゑて、のそく歩き出す。鳥は知らぬ顔をして何かお互に話をして居るらしい。愈、癩癩にさはる。垣根の幅がもう五六寸もあつたら、ひどい目に逢はせてやるのだが、残念な事には、いくら怒つても、そのそとしかあるかれない。

漸くの事、先鋒を去ること約五六寸の距離迄来て、もう一息だと思ふと、勘左衛門は申し合せたやうに、いきなり、羽搏きをして、一二尺飛び上つた。その風が、突然吾輩の顔を吹いた時、ハツと思つたら、つい踏みはづして、ストーンと落ちた。これはしくじつたと、垣根の下から見上げると、三羽ともとの處にとまつて、上から嘴を揃へて、吾輩の顔を見下ろして居る。圖太い奴だ。睨めつけてやつたが、一向利かない。背を丸くして、少々唸つたが、益だめだ。余が彼等に向つて示す怒の記號も、何等の反應を呈しない。考へて見ると無理もない。吾輩は今まで彼等を猫として取り扱つて居た。それが悪い。猫ならこのくらゐやれば、慥に應へるのだが、生憎相手は鳥だ。

機を見るに敏なる吾輩は、所詮無益と見て取つたから綺麗に縁側へ引き上げた。もう晩飯の時刻だ。運動も好いが、度を過すといかぬもので、全身が何となく緊りがない。ぐたぐたの感がある。しかのみならず、まだ秋の取りつきで、運動中に照りつけられた毛ごるもは、西日を思ふ存分吸

收したと見えて、ほてつてたまらない。

—吾輩は猫である—

山田珠樹

東京市の人
佛文學者

二〇 雙眼鏡

山田珠樹

クローネ
奧太利の貨幣の
單位、我が國の
約四十一錢に當
る
ツァイス
獨逸の會社
その製品の精巧
を以て稱せらる

一九二一年のことである。奧太利のウインに滞在してゐたが、なにしろクローネが馬鹿に廉くなつてしまつてゐたので、私は一萬クローネを擲つて九倍のツァイスの雙眼鏡を手に入れた。豫備歩兵少尉であるから、一朝有事の際に野戰小隊長として必須のものであり、さうでなくとも、平時演習に召集された時に、大いに役立つだらうと思つたからである。

さて買つたことは買つたが、なかなか利用の機會は來な

マルセイユ
地中海にのぞむ
フランスの都會
スエズ運河
地中海と紅海と
を連絡する海洋
運河

かつた。歐洲の旅には徒に肩を凝らす因になつたに過ぎなかつた。歸りの印度洋經由の船の中でも、餘り役に立たなかつた。マルセイユを出た時は、涙で曇つた眼には用ひやうがなかつた。スエズ運河では陸に陽炎が立つてゐて、そんなものを使へば肝癩が起るだけである。印度洋はギラギラ光るので光線除の色眼鏡をかけてゐた。東洋に來た時は、もう雙眼鏡の存在などは忘れてしまつてゐた。馬關海峽・瀬戸内海は、この肉眼で喰ひ入るやうに見詰めて通つた。

さて日本に歸つて、買入の時の本旨に従つて軍隊で使ふ筈だつたが、職務の關係で召集免除になつたので、これも駄

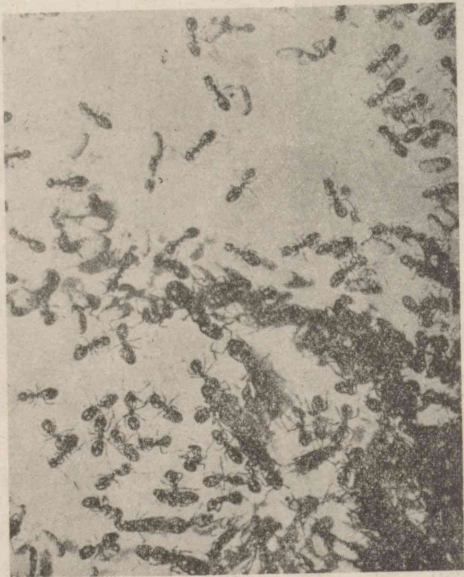
目になつた。勿論これを使ふやうな旅行も出来なかつたから、空しく戸棚に寝かしてあつた。

病氣になつて、鎌倉に療養生活を送ることになつた。住居は鎌倉といつても山の中で、海などは皆目見えない處なのだが、どうしたことか、少数の療養生活の手廻品のなかに、この雙眼鏡が入つてゐた。

或日、ふと庭先の土の上にこの雙眼鏡を向けた。そしてそこで營まれてゐる蟲の世界の複雑さに今更驚かされた。小さい者の世界が、その者を驚かすことなく、そのままの姿で擴大して見られる。自分は雙眼鏡の圖らざる効用に驚いた。以下雙眼鏡による採集の二三を拾つて見よう。い

づれも八月のことである。

眼鏡に入つた庭先、方三尺位の地面である。搦つても搦



蟻

つても生えて來る雜草の株がいくつかある。八月の午さがりの烈日が一杯に照りつけてゐる。土には方々に乾割が見える。此の間に非常に多くの蟻が右往左

往してゐる。大きい、小さい、いろいろの種類がある。なにをしてゐるのか知らない。とにかく休みなく動いて

ある。其の間を時々名の知れない小蟲が跳ねたり這つたりしてゐるが、これは速いのもあり、遅いのもある。突然眞つ黒な松毛蟲が眼界の一方から一方へ非常な速度で横切つた。私は毛蟲がこんな速力を持つてゐるのにびっくりした。不思議なことに、これだけ多くの蟲が狭い範圍に活動しながら、絶対に相互の間に交渉がない。全く周圍には

無關心で動き廻つてゐる。

暫く見てゐると、この混雜の間に蜻蛉が一匹フワリと地面に下り立つた。そのまま凝つと動かずにゐる。風がないから羽根も動かない。これにはきつと蟻が集る

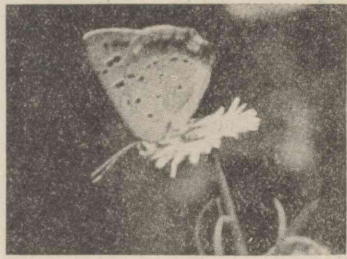


蜻 蛉

だらうと思つたが、いくら時間が経つてもそんな模様は見えなかつた。

日廻草が咲き切つて、花瓣が少し黒ずんで來た。そこへ小鳥が來て、花柄に止まりながら、頸を延ばして、花の中を切りに啄いてゐる。春の頃に、尾長鳥が椿の花や櫻の花の蜜を嘗めてゐるのは見たが、枯れかゝつたこの花の模様ではそれとは違ふらしい。蟲を啄んでゐるのだなと思つた。その時、啄み損ねた物がポロリと土に落ちた。私は雙眼鏡をすぐ眼にあてた。それは實だ。或は種といふべきものかも知れない。後に新聞を見てゐたら、日廻草の實は食用になり、その風味は朝鮮の松の實に似てゐるとあつた。

爽かな早朝のことである。櫻の葉陰を洩れて薄赤い朝日が露に濕つた土にこぼれてゐた。櫻の枝には切りに雀が囀つてゐる。その時、櫻の葉陰からなにか白いものがヒ



ラヒラと落ちて來た。すると二、三羽の雀がバタバタと追つて來て、争つて途中でこれを啄んでしまつた。私は雙眼鏡によつて、落ちて來るものが小さな蝶であることを知つた。多分蛹から出たばかりのものではないかと思つたが、そこまでは雙眼鏡では分らなかつた。何べんかそんなことが繰返された。なかには、傍の月見草の叢に飛びこんで、無事に雀の嘴を逃れる

ものもあつた。

大きな瓢箪と長い糸瓜を得たいと思つて、縁先に日除かたがた柵を作つた。案外の成功で糸瓜は一間に餘り、瓢箪



も大分大きくなりさうだつたが、なんだか中途で發育が止つたやうに思へた。氣がついて見ると、葉が大分蟲にやられてゐる。丸坊主になつたのさへある。雙眼鏡で見ると、居る、居

る！ 下から棒で衝かしたが、それ位では落ちない。困つてゐると、幸ひ東京から脊の高い男が來たので、これに頼ん

で踏臺に乗つて、箸で撮み捨て、貰つた。

私は雙眼鏡で見ながら指圖してゐた。その男は暑い暑いとひながら切りに撮んでゐた。その翌々日、私はその男が腦溢血で倒れたといふ通知をうけた。

蟬が何か異常を告げるやうに、切りに特異な鳴聲を出す。そこに雙眼鏡を向けると、必ず蠅螂に喰ひつかれてゐるのが見えた。蠅螂はいつもきつと上から逆に蟬の眼玉に喰ひついてゐた。

—讀書の眼—

二一 會得

沼波 瓊音

沼波瓊音
名は武夫
愛知縣の人
國文學者
昭和二年歿（年
五十二）

高等學校に居た頃、少しばかり僕は柔術を稽古した。或日僕は某とか云ふ黒帯の先生と組んだ。習つた術をいろいろ應用して居る内、僕はドタンと仰向に倒された。起上らうとする途端、先生は僕の右手を抱へ込み、仰向になつて、僕の胸の上へ斜にのつてしまつた。先生は肥つた人であるが體は綿のやうに軽い。軽いけれども奈何しても押除けることが出来ぬ。足で疊を蹴つて起きようとしても無効だ。焦慮つて體を動かすと、先生の體も従つて動く。二人の體はX字形をなした儘で、グルグル疊の上を廻るばかり

りである。やがて先生は體を外して、自分が下になり、僕を
 して先生がやつたやうに上に乗ら
 せて、斯うおさへられた時には、斯う
 すれば起きられる。」と言ひさま、グル
 リと起きると、忽ち僕が下になつた。
 これからこの起きる法を學ぶ爲に、
 前の通り先生におさへられ、先生の
 やつたやうに起きようと試みた。
 「無効だ。」と先生は大喝した。「自分ば
 かり起きようとするとするから無効だ。我と敵と一體になつて
 起きれば譯無い。」僕は汗を流して屢試みる内、熟練したの



(一のそ) 込へ押

身を棄ててこそ
 山川の末に流る
 るとちがらも、
 みを捨ててこそ
 浮ぶ瀬もあれ

か、疲れた爲か、全く我を忘れて、夢の如く起上る。「然うだ」と
 先生が言つた時、僕は大きな體の上
 になつて居たのである。「身を棄て
 てこそうかぶ瀬もあれ」と云ふこと
 は此所です。今の心持を忘れちや
 いけませんよ。」と先生が言つた。
 その後屢試みたが、實に譯なく起
 きられる。今はその術の名なんか
 忘れてしまつたが、起上る時の心持
 はよく覚えて居る。その時僕は、その術を會得したと共に、
 會得といふことの意味をも始めて會得した。我と敵と一



(二のそ) 込へ押

體になる。身を棄て、こそうかぶ瀬もあれ。こんな語を何度聞いたつて、何度讀んだつて、起上ることは出来ぬのだ。自ら敵と一體になり得、自ら身を棄て得た。その時は殆ど偶然の如く爲し得るが常だが、その刹那に、この語を味つて、ハッと思ふと、偶然爲し得た際の心の情態、體の情態が、正確に明晰に意識され、その意識は大磐石の如く胸に凝つて、永久小動きもしない。會得したといふことは、この情態を云ふのである。文字に依つてのみ事を知らうとする輩は、前記の語を語記して、敵を組み伏せようとする者ではあるまいか。

二二 大海の日の出

徳富蘆花

徳富蘆花
名は健次郎
熊本縣の人
文學者
昭和二年歿（年
六十）

枕を撼かす濤聲に夢を破られ、起つて戸を開きぬ。時は明治二十九年十一月四日の早曉、場所は銚子の水明樓にして、樓下は直ちに太平洋なり。

午前四時過ぎにもやあらむ。海上猶ほの闇く、波の音のみ高し。東の空を望めば、水平線に沿うてくすぶりたる樺色の横たはるあり。上りては濃きプロシャン藍色の空となり、こゝに一痕の弦月ありて黄金の弓を懸く。光さやかにして、さながら東海を鎮するに似たり。左手に黒く差出でたるは犬吠岬なり。岬端の燈臺には廻轉燈ありて、陸より海にかけ、しきりに白光の環を畫きぬ。

暫くする程に、曉風冷々として青黒き海原を掃ひ來り、夜

の衣は東より次第に剥げて蒼白き「曉」の波を踏みて此方へ
 此方へと近寄る状も指點すべく、磯の黒きに濤の白く打懸
 かる様も漸く明らかになり來りぬ。眼を上ぐれば、黄金の
 弓と見し月も何時しか白銀の弓と變り、くすぶりて見えし
 東の空も次第に澄みたる黄色を帯びぬ。森々たる海原に
 立つ波の、腹は黒うして背は蒼白く、夜の夢はなほ海の上に
 さまよへど、東の空すてに臉を開きて、太平洋の夜は今明け
 んとするなり。



犬吠岬の燈臺

りぬ。この時、日の使とも覺しき渡り鳥の
 一列鳴きつれて海原を掠めて過ぐれば
 大海の波といふ波は盡く爪立ちて東の方
 を顧み、一種待つあのさゝめき—聲なき
 聲四方に滿つ。

五分過ぎ—十分過ぎぬ。東の空に見る—金光射し來り、
 忽然として猩紅の一點海端に浮み出でぬ。すはや、日出
 でぬと思ふ間もなし。息をもつかせず、海神が手もて撃ぐ
 るまゝに、水を出づる紅點は金線となり、黄金の櫛となり、金

蹄となり、一搖して名残なく水を離れつ。水を離るゝその時遅く萬斛の金たら〜と昇る日より滴りて、萬里一瞬、此方を指して長蛇の如く大洋を走ると思へば、眼下の磯に忽焉として二丈ばかり黄金の雪を飛ばしぬ。

—自然と人生—

二三 乃木將軍

櫻井忠温

櫻井忠温
愛媛縣の人
陸軍少將

一 將軍の涙

乃木大將は、涙もろい人であつた。人一倍情にはもろい人であつた。

二百三高地を爾靈山(汝の靈)と名付けたのも、こゝに死んだすべての人のためにといふ意味であつた。保典少尉の

保典少尉
乃木將軍の二男
明治三十七年一
月三十日、二百
三高地で戦死し
た



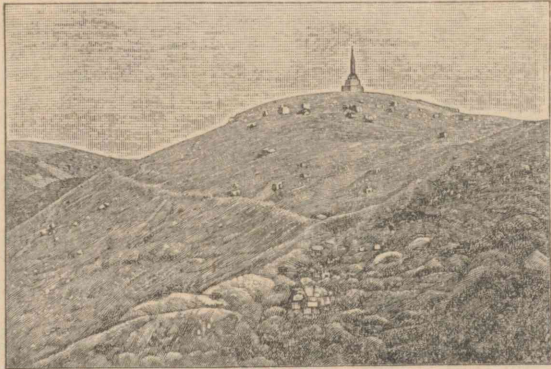
旅 順 開 城

(集畫壁館畫繪念記德聖)

死に對しても、爾靈山の名は萬斛の涙を含む文字となつた。

陣中でも兵隊が乃木大將を見ると、一々敬禮をするので、陣中だから、敬禮をしなくてもいゝ、とんだ邪魔をしたのう。といつて立去られるのが常であつた。負傷兵に逢ふと、必ず馬をとめて、容體を懇ろにたづねられた。

見渡す限り負傷兵が一ばいに轉がつてゐる。廣い野の上に何千といふ負傷兵が、山から運ばれて來て、横たへられてゐる。

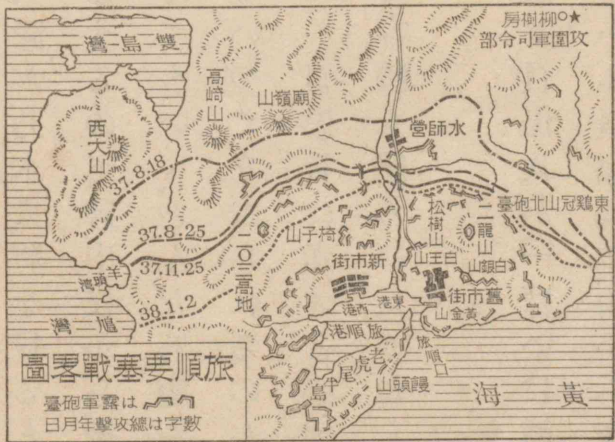


地高三〇二

もう、手のつけやうもなかつた。眞夏の太陽が焼火箸のやうな光線を投げかけてゐる。うめく聲が、陰々と野の上を蔽うた。

のたうち廻つて苦しむものもある。血を吐くものもある。瘡學的に手足を動かすものもある。手の折れたの、足の碎けたのもある。ある者は狂ひ、ある者は靜かに。

血が、野の草を傳うて地に流れ込んでゐた。



手のきかぬものは顔の蠅を拂ふことも出来ぬ。足のきかぬものは、立つて水を求むることも出来ぬ。それは明治三十七年八月末のある日の晝下りであつた。第一回總攻撃に失敗して、第一線に生き残つてゐるものももう戦ふ力はなかつた。そして、何千、何萬とも知れぬ負傷者が、あの谷、この野に眞黒に横たはつてゐた。死者は無論多かつた。その死體を焼くことすら出来なかつた。三千の聯隊、一夜にして、五十人になつたのもあつた。

當時、乃木大將の下に集まつて来る第一線からの報告は、

いづれも大將の胸を痛めるもののみであつた。

「師團が數回の突撃も効を奏せず、今はただ殘兵を集めて唯一回の突撃を行はんのみ。」

「師團は唯僅かに一回の突撃を行ふ餘力あるのみ。師團は命令なるが故に突撃を決行するのみ、成功は素より望み難し」といふ報告もあつた。

「死ね」と命令する乃木大將の胸中、かゝる報告を耳にする大將の胸中は、熱鐵を嚙むの思であつたらう。

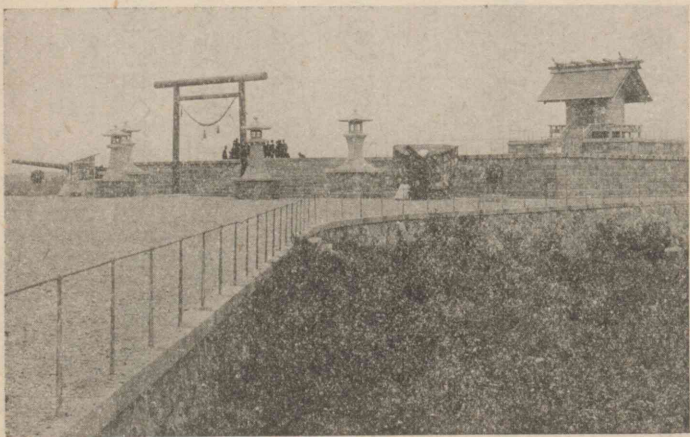
全滅、全滅、それは旅順戦の名物であつた、慘烈を極めた旅順戦を語る代表語であつた。

バルチック艦隊は來さうだ。北方の戰場では乃木軍の

北進を待つてゐるといふ時、前面の状況は全滅につぐに全滅を以てし、徒らに、部隊を死に抛つに等しい事を繰返した。乃木大將は八つ裂にされるより苦しい思であつたらう。

その時、乃木大將は靜かに歩いて、野の中に立たれた。見渡す限り負傷兵ならざるはない。

乃木大將の眼は涙に光つた。そして後に倒れようとされたのを副官がやつと支へた。



(山玉白順旅)祠骨納者歿戦

しばらくして、乃木大將は副官に「氷を持って来い」といはれた。

乃木大將は負傷兵の側に行つて、よくやつてくれた、早くよくなつて又来てくれよ」と、一々手を取るやうにしていはれた。

そして、大勢の負傷兵の間を一々、かういつて慰めてまはられた。

やがて、副官が運んで来た氷を割つて、負傷兵の口へ入れてやられた。

負傷兵達は涙を流し、大將を仰ぎ見ながら、大將のもとで死なうと思はないものはなかつた。

二 火を消して

參謀部の電話のベルがけた、ましく鳴つた。

「オーイ、何か。」



(右)典保木乃(左)典勝木乃

と、受話器を耳にあてながら白井中佐はかういつた。

「俺か、俺は白井ぢや、貴様は齋藤か。フム、又失敗か、何、乃木少尉が戦死し

た、戦死したのか。 どうして……傳令中に、サア、それを將軍に言はぬといふわけには行くまい。 よし、何とかするよ。 ウム、ウム、もう一度夜襲する。 よし、弔合戦をや

つてくれ。さよなら。
かういつて電話は切れた。

白井中佐は受話器を手にしたまゝ、呆然としてゐた。窓の外にはヒュー〜と寒い風が闇の中を吹いてゐた。

白井中佐は時計を見ると、もう九時に近かつた。

中佐はどうしようかと考へた。しかし、戦況を報告しなければならぬので思ひ切つて、大將の部屋へ入つて行つた。部屋の中は眞暗であつた。大將はもう休まれたのかと思つて、一寸躊躇した。

併し、大將が火もつけない部屋にゐられることはいつもの事なので、別にそれを怪しみもしなかつた。

すると暗の中から「だれかい」といふ大將の聲がした。

「ハイ、白井であります。」

「さうか、何か用か。」

「戦況を申上げに……」

かういふと、パチットとマッチを磨る音がして火がついた。大將の顔が蒼白く光つた。

大將は蠟燭に火を移された。

蠟燭のしんがジ〜と音を立てた。



ルセツテスと軍將木乃

「戦況といふと……」

「二百三高地でございます。」

「ウム、どうたつたな。」

「遺憾ながら、又失敗に終つたと、齋藤參謀から言つて來ました。」

「さうか……死傷はどのくらゐあつたな。」

「ハ、まだ、はつきりわからぬと思ひますが、すぐ調べまして

……」

蠟燭の火にてらされた大將の蒼い顔を見ると、中佐はそれ以上のことは、口から漏らしかねた。

大將はヂッと灯を見つめたまゝ、何ともいはれなかつた。大將の顔を打ちまもつてゐた中佐の目から、涙が滲み出

て來た。そして手足がブルブルと慄へた。

「死傷をよく調べて下さい。」

大將は思ひ出したやうにかういはれた。

「はい。」

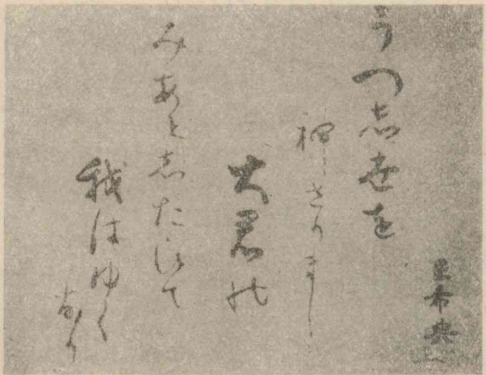
「もうそれだけかい……」

「それに閣下、閣下の御令息は、戦死されました。」

かう中佐の口から我ともなしに吐き出された。何だか大將から引き出されたやうに。

「何、保典が……さうか。」

筆蹟
臣希典上
うつし世を神さ
りまし、大君の
みあとしたひて
我はゆくなり



乃木大將筆蹟

かういふと、大將はフイと蠟燭の火を消してしまはれた。そして、體がアンペラの上に倒れたやうな音がした。中佐はヂッとそこを見つめた。しかし、もう何の音もしなかつた。

中佐は足音を忍ばせて外へ出た。外は強い風がゴウゴウと音を立て、吹いてゐた。

—將軍乃木

二四 英雄の半面

藤村 作

世に英雄豪傑と稱せられるものは、唯強いばかりの人ではない。その剛強な一面と、その赫々たる勲業の表とを見ればかりては、眞の英雄の面目を知つたといふものではない。

い。左の二つの事蹟はこれをよく事實の上に證明したも

のではあるまいか。

上杉謙信が或夜、石坂檢校に平家を語らせて聞いた。鶴の段に至つて謙信は頻りに落涙した。傍の者共が、かゝる勇ましい物語を聽いて泣かれるのは、如何したわけだらうと異しみ思ふ様であつたから謙信は、「あゝ我が國の武術も衰へた、殘

念な事だ。昔鳥羽院の御時、禁中に妖怪が出た事があつた。



(筆谷嵩高)

治退鶴政頼

八幡太郎が庭上で鳴弦をして、鎮守府將軍源義家と名宣りをあげた所が、妖怪は忽ち消えたと傳へてゐる。その後、源頼政は鶴を射落したが、死ななかつたので、猪俣太がこれを刺して殺したといふではないか。義家の鳴弦をなしたのは天仁元年の事で、鶴の出たのは近衛院の仁平三年であるから、僅かに四十六年の違であるのに、武徳は斯うも甚だしく劣つて居る。今は頼政の時から四百五十年は経つてゐるのであるから、自分の武も亦遙に頼政に劣つて居るのであらうと思つて、覺えず落涙したと語つたといふ。

これとよく似た話がある。相州北條の幕下で、佐野の城主をした天徳寺といふ勇將があつた。或時、琵琶法師に平

家を語らせて聞いた事があつた。豫め、おれは哀れな事が聞きたいから、その積りて語れと言つて置いた。法師は承知致したといつて、やがて佐々木高綱が宇治川の先陣をした條を語り出した。すると、曲半ばに、天徳寺は雨雫と涙を流して聞いてゐた。

夫が終つてから、今一

曲前のやうにあはれな事を聽かせよと注文したので、法師は那須與一が屋島の戦場に扇の的を射る條を語つた。やはり半ば頃になると、天徳寺は切りに泣いてゐた。



(一のそ) 圖の扇射一與須那
(筆雲曉々愷)

その後數日経つてから、天徳寺は側近の者に「この間の琵琶はどう聴いたか」と聞いた。一同は「まことに面白く覚えましたが、唯一つ心得ぬことがございました。二曲ともに



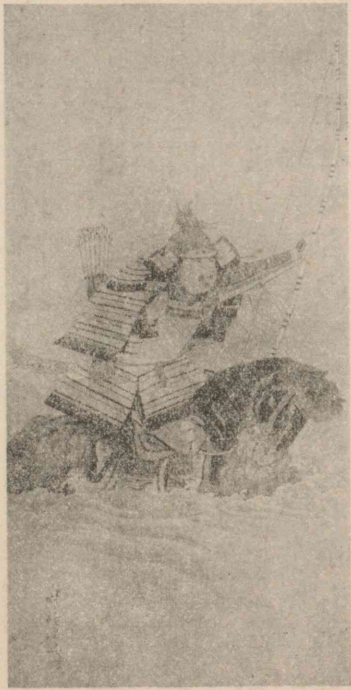
(二のそ) 圖扇射一與須那
(筆雲曉々惺)

武者の勇氣功名の物語で、哀れな事は少しもございませぬのに、君には感涙に咽んでおいてに

なつたやうに見受けました。その事が今に不審でござい
ます。」と申した。之を聞いた天徳寺は驚いて「只今までは各
を頼もしく思つてゐたが、今の一言を聞いて力を落したぞ。

右大將
源頼朝
蒲冠者
源範頼
頼朝の弟

先づよく佐々木が事を心に浮べて見よ。右大將が、御舎弟
の蒲冠者にすら賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらなかつた
程の名馬生食いひずきを戴いて出陣したではないか。そのかひも
なく宇治川の先陣を
人に譲つたら、必ず討
死して再び御目には
懸らぬと申して、暇を
して鎌倉を立つてゐ
るのではないか。彼が當時の心を思へば哀れてないこと
がどうしてあらう。」と語つて、また涙を拭つた。暫くして「ま
た那須與一にしても、人多き中から選ばれて、唯一騎陣頭に



(筆雲草崎田) 陣先川治宇

出てから、馬を海中に乗入れて的に向ふに至るまで、源平の
兩陣は鳴りを静めて、之を見物したといふ。若し射損じた
ら、御方の名折れ、馬上に腹を切つてしまはうと思定めた覺
悟を察して見よ。弓矢執る身ほど哀れな者はあるまい。
自分はいつとも戦場に臨んでは、この高綱や宗高が心で槍を
執つて居るので、彼の平家を聞いては、我が心中に引較べて、
覺えず落涙したのであるぞよ。先刻の言葉の様子では、各
の武は、たゞ一旦の勇氣に任せるもので、眞實の心から出る
ものではないらしい。それではどうも頼もしくないとい
つて歎息したといふ。

謙信といひ、天徳寺といひ、唯事柄の表面のみを見ないで、

自分の心を推して他人の胸の中に入れて、その胸底の秘を
讀んで、眞によく他を理解し、同情した心は、まことに貴いも
のである。斯うして温かな心があり、同情があればこそ、多
くの頼もしい家來をも懐けたのである。半面に斯うした
慈母の如き心のあるのが、眞に英雄の英雄たる所だといつ
ても敢へて過言ではあるまい。

二五 皇室に對する情熱

永田 秀次郎

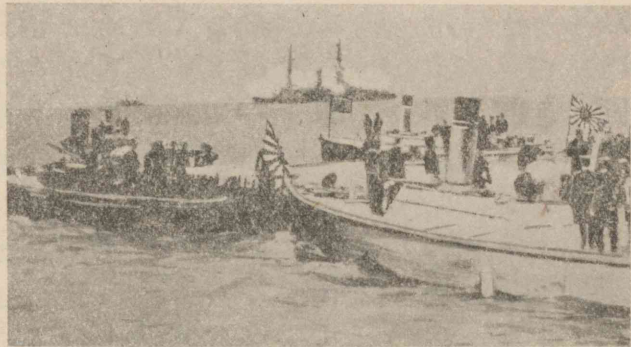
さきに今上陛下が御洋行遊ばされるといふ事に御決定
の時、我等國民の或者は極度にこれを心配して、或は明治神
宮に祈り、或は死を以て之を諫止し奉らんとする者さへあ

永田秀次郎
兵庫縣の人
貴族院議員

るといふ噂があつた。その考へ方の善悪は別として、その

皇室に對する情熱は正しく純真なものである。

私は當時東京市聯合青年團員數萬の諸君と共に、芝浦に於て奉送申上げた時には、現在の歡喜と前途の憂慮との交錯した、實に名狀すべからざる感激を覺えたものである。更に、陛下御洋行中の御消息の傳はる度に、我等國民のなした一喜一憂は、全く以て眞劍・



横濱埠頭御出發

熱烈なものであつた。愈、御歸朝後、日比谷公園に於ける青

先帝
大正天皇

年團の御歡迎會に於て、颯爽たる御英姿と、朗々たる令旨を拜した時は、嬉しさ、有難さに眞に肉躍り血湧くの思があつた。常に先帝の御不例にわたらせられた事を心密かに憂苦して居た際であつたし、全く嬉しさの餘り、泣かざるを得なかつた。

兩殿下
今上天皇・皇后
兩陛下

大地震
大正十二年九月
の關東大地震

大正十三年六月五日、我が東京市は宮城前に於て御成婚奉祝會を催し、兩殿下の御親臨を仰ぎ、私が東京市長として萬衆の中に立つて奉祝文を朗讀した。その時私が最も心配して居た事は、光榮に感激する餘り、兩殿下に咫尺して満足に奉祝文を讀み得ないかといふ事であつた。不肖なりと雖も、私には大地震に際して平然市長室に踏止まつた位

の度胸はある。唯、事一度皇室に及べば、動もすれば全く理性を失つて感情にのみ支配される事を如何ともする事が出来ないのである。随つて、私のこの日の心配は私の度胸の心配ではない、私の感情の破裂する心配である。強大なる理性を發揮して、この感情の破裂を壓伏する事が、實に私の最大難事であつた。

これは單に私の經驗を述べたものであるが、思ふに恐らく我が國民の總べても亦皇室に對する情熱は私と同じものであらう。何故に皇室を尊敬するかと問はれたら、或は神勅を擧げ、或は萬世一系の皇統を指し、或は君幹臣枝の關係を述べて理由とするであらう。

しかしながら、我々の感情から言へば、皇室を尊敬するに理窟も何もあつたものではない。太陽が東から出るに何で理窟の必要があらう。理窟があつてもなくつても太陽は東から出て西に入る。我々の皇室に對する情熱は全く理窟を超越して居る。理由や説明は實は後から考へ出したもので、この理由や説明を聞いて始めて皇室を尊敬するのではない。皇室を尊敬して居る事實があつて、その事實に後から説明や理由を附けたのである。

我々國民が極度に楠公を崇拜し、乃木將軍を尊敬する所以は楠公の精忠や乃木將軍の人格を慕ふと云ふよりも、この二公が最もよく我々の國民的情熱を代表して居るから

である。この國民的情熱は殆ど我々の天性である。我々の本能である。我々は斯かる國民的情熱を有し得る事に、無上の光榮と幸福とを感ずるのである。

二六 母を尋ねて(その二)

楠山 正雄 (譯)

楠山正雄
東京市の人
文學者

ボカ
南米パラニヤ河
にのぞむ小都會

ロサリオ
南米アルジェン
チンの第二の都
會

マルコーはすつかり疲れて、熱病病みのやうにふらふらと夢心地でボカの町に着き、その或貧しい家で宿屋の門番と並んで夜を明して、その次の日は、澤山の小舟や曳船やボートの見える材木の上に腰をかけて夢現ゆめげんに一日をすごして、その夕方やつとロサリオの町に向ふ、果物を積込んだ大きな帆前船に乗込みました。その船に、三人まで日にや

ジェノア
伊太利西北部の
港市

パラニヤ河
ブラジル山地に
發源し、アルジ
エンチンの東北
部を流れ他の川
と合してラブラ
タ川となつて大
西洋に注ぐ

けた丈夫さうなジェノア人の船頭がゐて、國訛の言葉で話をするのを聞いて、やつと元氣が出て來ました。

この航海は三日と四晩かゝりました。この小さな乗客にとつては、見るもの聞くものがびつくりする事ばかりでした。パラニヤ河といふその河の大きいことといつたら、本國のイタリヤの國の長さを四倍にしてもまだ足らないといふほどでした。

廣い、長い―はるばると一體何處まで續いてゐるのか知れない、魔物のやうな―大きな河の上を、それに比べてはいかにも小さい帆前船が、のろゝと進んで行きました。今でも大きな蛇や虎が住んでゐるさうに思はれる、檸檬れもんの樹や

柳の樹の茂つた島と島との間を、通る事もありました。狭い水道に入るかと思ふと、まるで湖水のやうな廣い水の上に出ました。何處まで行つても静かな寂しい河の景色で、この先何年も何年も、河を上つて奥まで行かなければ、おかあさんには逢へないのではないかといふ氣がしました。

一日に二度、マルコーは水夫たちと一緒にほんの僅かのパンと鹽漬の肉を食べました。マルコーが黙つてふさぎ込んでゐるので、水夫たちも話をしかけません。夜になると、甲板の上に出て寝ました。時々いやな夢を見て、はつとして目をさますと、いつも青い月が頭の上に照つてゐました。ひろくと霞んだ水の上にも、岸の上にも、遠くの山の

上にも、銀のやうな光がやさしく流れてゐました。

コルドバ
南米アルジェン
チン中部の都會



バドルコ

「コルドバ、コルドバ」と、マルコーは心の中でこの名をくり返して見て、何だかお伽噺の中で聞いたふしぎな町のやうな氣がしました。「だが、かあさんもこの川の上を舟で通つたのだ。あの島や此方の岸の景色をやはり眺めたのだ。」さう思ふと、なつかしい心も起るやう

になりました。

晩になると、水夫の一人がよく船で唄を歌つてゐました。

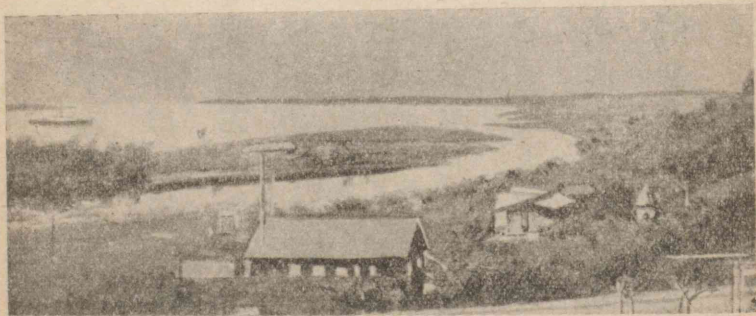
その唄を聞くと、極小さい時分、おかあさんが枕元でよく歌つてきかせた昔の唄を思ひ出しました。一ばんしまひの晩にはその唄を聴きながらとうとうたまらなくなつて、しやくり上げて泣き出しました。その時水夫はびつくりして唄を止めて、かう言ひました。

「どうした、どうした、しつかりしろよ、なあ。ジェノアの男ともあるものが、國から遠く離れたといつて泣く奴があるものか、海のジェノア人は元氣よく、大威張りで世界中を股にかけて歩いてゐるのぢないか。」

この言葉を聞くと、マルコーは體中の血がかつと沸き上るやうに思ひました。小さな拳で枕を叩いて、寝ながら頭

を上げました。

「さうだ、さうだ、たとへこの先何年かからうが、何十年か、らうが、世界中を何百里も何千里も歩きまはらなければならぬやうな事があつても、きつとかあさんを尋ね出して見せるぞ。もうへとくとくに疲れて死ぬばかりになるまで尋ねて、かあさんの足の下にぶつ倒れて死んでもいい。一度でも逢はない中はどうしたつて止めるものか。しつかり



町のオリサロと河ヤニラバ

しろ、しつかりしろ。」

かうして、新しい、晴れどした元氣でその翌日の曉方、マルコーはロサリオの町に着きました。それはパラニヤ河の高い岸の上にある町で、港には何百とない、方々の國々の旗が涼しい朝風に翻つてゐました。

ブエノスアイ
レス
南米アルジェン
チンの首府

ロサリオの町へ入つて見て、マルコーはまたあの厭なブエノスアイレスの町へ歸つて來たやうな氣がしました。同じやうな低い白い家の並んだ町が、どこまでも果しなく續いてゐて、人や馬や馬車の群が、がや／＼、がや／＼、込みあつてゐました。いつまで行つても一つ所を往つたり來たりしてゐるやうな氣持で、一時間ばかり尋ねた末、やつとポ

カの人から紹介された宛名の家を尋ねあてました。ほつと一息ついて、門口の鈴の綱を引くと、中から意地のわるさうな顔をした執事が出て來ました。その男は素氣ない、外國訛のある言葉でマルコーの用事を聞くと、

「主人は留守だ。御家族連れて昨日ブエノスアイレスに行かれた。」

慳貪にかう言ひ放して奥に入らうとしました。マルコーはおど／＼しながら紹介の名刺を出して、哀しい拜むやうな聲で、

「僕はほんたうに困りました。外に一人も知つてゐる人はいないんです。」と言ひました。

男はしかし冷笑するばかりでした。

「うるさい奴だ、貴様の仲間はこの町にも澤山あるぢやないか。乞食をするならイタリヤへ歸つてしろ。」

かう言つてびつしやり扉を閉めて中へ入つてしまひました。マルコーは石像の様に堅く立ち竦んでしまひました。

二七 母を尋ねて(その二)

仕方がないのでマルコーはまたすご〜町の方へ歩き出しました。頭の中は旋風が巻いてゐるやうで、何をどうしていゝのか、かいても方角がつかなくなつてしまひました。ロサリオからコルドバまでは汽車があるので、け

れど、どうして汽車賃が拂へませう。マルコーのぶらさげたごみだらけな袋の中には、今日のパンを買ふだけのお錢しか残つてはゐないのでした。仕事をしてお金をこしらへる、誰に頼んで仕事をさせて貰ひませう、乞食をする、今の執事のやうな意地のわるい男に行く先々で野ら犬のやうに追ひ拂はれるだけでせう。マルコーはがっかりして路傍に坐つたまゝ、崩れかゝつた石の壁にもたれてゐました。長い〜町の果には、だゝつびろいアメリカの野原が、そこにも果しなくひろがつてゐました。

往來の人達が通りすがりに小犬のやうに蹲つてゐるマルコーの體を蹴つけて行きました、ひどい凸凹の路の上

ロンバルヂヤ
伊太利の北部

をがたくり、がたくり馬車が喧しく走つて行きました。子供たちは五人十人固まつて来ては不思議さうにマルコーの様子を眺めました。それもこれもマルコーの目には入らない風で、ただもう死んだもののやうになつてゐますと、だしぬけにロンバルヂヤの訛のあるイタリヤ語で、

「どうしたんだ。この子は」と聲をかけられました。

マルコーはふと気がついて頭を上げると、そこに、あのジェノアから船の中でおなじみになつ



たロンバルヂヤの百姓のおぢいさんが立つてゐました。

「あゝおぢいさんでしたか。」

かう言つて、マルコーはなつかしさうにおぢいさんの手を握りました。それから、おぢいさんに聞かれるのを待たず、自分のあれからの身の上を話して、

「仕事を見付けて下さい、仕事を見付けて下さい。」と叫びました。

おぢいさんは物やはらかに止めて、

「まあお待ち。仕事々々といふがね、まあそれよりか、こんなに大勢國の人が来てゐるんだから、お前さんの旅費ぐらゐ、どうにかなりさうなものだ。」と言つておぢいさんは

マルコーを連れて、長い町はづれの、一軒の宿屋まで歩いて行きました。その家の戸口には星の看板が出てゐて、「イタリアの星」と屋號が書いてありました。

その大きな食堂には澤山の人が集まつて、愉快さうにお酒を飲んで、大聲で話したり、唄を歌つたりしてゐました。その言葉は訛こそちがへ、みんなイタリアの言葉でした。

おぢいさんはマルコーの手を引いて、心易さうに酔つた人たちの中をずん／＼分けて行つて、テーブルの角の所に突立ちました。そしていきなり演説をはじめました。

「皆さん、こゝに我々の同胞で、かはいさうな子供がゐるのです。母親をたづねて、ゼノアからはる／＼ブエノスア

イレスマまでたつた一人て來たのです。所が、ブエノスアイレスマで聞くと、こゝにはゐない、コルドバに行つた。」といふのです。そこで、町の人に紹介狀を貰つて、三日四晩かかつて川船でロサリオまで來たのです。所が、その紹介の名刺を出すと無情にもてんで取り合つてくれない。懷中には一文も無し、頼る者は一人も無し、困り切つてゐるのです。正直なやさしい子だ。皆さんのお力で何とかかりますまいか。せめてコルドバまでの汽車賃はできますまいか。我々は遙々こゝまで來た小さい同胞を、野ら犬のやうに見捨てることはできませんまい。「どうしてできるものか。どうしてできるものか。」

みんなは一同に聲をそろへて、拳固でどん／＼テーブルを叩きながら、叫びました。

みんなは寄つてたかつて、マルコーの頭をさすつたり、腰を抱いたり、つかまへてお酒をのませたり、しまひには、

「可愛いマルコー君のおかあさんの健康を祝はう。」

といつて、乾盃したりしました。マルコーも涙を目に一杯ためながら、一緒になつて嬉しさうに盃を上げました。

かうしておぢいさんがみんなの間に帽子を廻すと、十分とかゝらない中に四十二圓のお金が集まりました。マルコーは氣ちがひのやうになつて、おぢいさんの首にかぢりつきました。

その次の日の朝まだ暗い中から、マルコーはコルドバに向けて出發しました。心の中は快活な元氣にあふれて、ひとりでに微笑が口元に浮かんで來るのでした。けれども、汽車が進んで行く中に、天氣はどんより曇つてくるし、窓の外の景色は段々陰氣に寂しくなつて行きました。

—(世界童話寶玉集)—

帝國新國文改版卷一終

帝國新國文改版卷一

定價 金六拾錢

昭和十二年五月二十八日印刷
昭和十二年五月三十一日發行
昭和十三年一月五日訂正印刷
昭和十三年一月八日訂正發行

編者 藤村 作

發行者 株式帝國書院
東京市神田區西神田一丁目三番地

代表者 守屋紀美雄

東京市京橋區銀座西二ノ三

印刷者 高橋 郁

東京市神田區西神田一丁目三番地

津田 俊

大阪府東區橫堀四ノ三
三莊藏書店
振替口座東京七〇〇



